

山梨県東八代郡豊富村

# 駒 平 遺 跡

KOMADAIRA SITE

村道シルクライン建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

豊富村教育委員会  
山梨県石和土木事務所

山梨県東八代郡豊富村

# 駒 平 遺 跡

KOMADAIRA SITE

村道シルクライン建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

豊富村教育委員会  
山梨県石和土木事務所

# 序

豊富村は甲府盆地の南縁、御坂山塊を源とし、笛吹川に合流する浅利川を中心に村落が発達し、御坂山塊の麓に所在するために自然があふれ、緑の多い村です。また曾根丘陵の台地には古代の遺跡が無数に分布し、歴史的環境にも恵まれております。

豊富村ではここ数年、地域振興を目的とした開発が盛んであり、今回の調査のきっかけともなりました豊富村道シルクライン建設もその1つといえましょう。

今回の調査は国道140号線から県道甲府・玉穂・中道線へのアクセス道路としての豊富村道シルクライン建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査で、本書はその調査結果をまとめた報告書であります。

調査の結果、縄文時代中期のムラの跡が発見され、住居址が全部で9軒も確認でき、さらにお墓の跡ではないかと思われる土坑も多数見つかり、縄文時代のムラの様子がかいま見えるような成果を得ました。

末筆ながら今回の調査にあたり、ご指導・ご協力をいただきました地元木原区の皆様をはじめ、関係各位に厚く感謝申し上げます。

本報告書が今後、より多くの方々に利用され、埋蔵文化財への理解が深められることを希望いたします。

1998年3月31日

豊富村教育委員会

教育長 秋原保正

## 例　　言

1. 本書は山梨県東八代郡豊富村木原字駒平に所在する「駒平遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 本調査は村道シルクライン建設に伴うものである。
3. 発掘調査及び出土品の整理は山梨県石和土木事務所の委託を受けて、豊富村教育委員会が実施した。
4. 本書における出土品及び記録図面・写真は豊富村教育委員会が保管している。
5. 本報告書の執筆・編集・写真撮影は岡野が行った。
6. 本調査にあたり、山梨県教育庁学術文化財課及び豊富村木原区の住民の皆様に御指導・御理解をいただきながら調査を進めることができた。心から謝意を表する次第である。
7. 発掘調査・出土品の整理及び報告書の作成については、次の方々から御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する次第である。

(敬称略)

小野正文・出月洋文・森原明廣・中山誠二（山梨県教育庁学術文化財課）、田代孝・新津健・長沢宏昌・保坂康夫・三田村美彦・野代幸和・市川恵子（山梨県埋蔵文化財センター）、末木健・今福利恵（山梨県立考古博物館）、林部光（中道町教育委員会）、野崎進（境川村教育委員会）、伊藤修二（八代町教育委員会）、望月和幸（御坂町教育委員会）、小渕忠秋（石和町教育委員会）、瀬田正明（一宮町教育委員会）、猪股善彦（积迦堂遺跡博物館）、竹田眞人（武川村教育委員会）、櫛原功一・河西学（帝京大学山梨文化財研究所）、中山真治（府中市教育委員会）、池谷信之（沼津市教育委員会）、戸田哲也・長崎元廣・山下勝年・増子康眞（日本考古学協会会員）

## 調　　査　組　織

調査主体	豊富村教育委員会
調査担当者	岡野秀典
調査事務局	萩原保正（教育長）・中込清彦（教育課長）・今井賢（教育係長）・井上妙・中楯紀男・井上陽子・柿嶋正宣
調査・整理	相原ツネ子・有泉つや子・有泉ふくじ・石原喜代の・石原次代・長田長美・
参　加　者	長田晴美・河野紀久代・小林英子・小林諭・小林よ志子・小林芳次・桜井里子・桜井幸子・高野萬千子・塙田よ志江・土橋章夫・中沢浦子・萩原定子・
(敬称略)	萩原まつえ・村松俊江・山口喜代・渡辺きく江

# 目 次

序

例言

目次

第1章 調査に至る経緯及び調査方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査方法及び基本層序	1
第2章 地理的歴史的環境	6
第3章 検出された遺構と遺物	8
第1節 A区の遺構と遺物	8
第2節 B区の遺構と遺物	13
第4章まとめ	17
第1節 住居址について	18
第2節 土坑について	18
引用・参考文献	20
報告書抄録	

# 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図・調査区全体図	2
第2図 A区全体図	3
第3図 B区全体図	4
第4図 調査区土層図	5
第5図 周辺遺跡分布図	7
第6図 1・2号住居址(1)	21
第7図 1・2号住居址(2)	22
第8図 3号住居址・1~2号土坑(1)	23
第9図 3号住居址・1~2号土坑(2)	24
第10図 4号住居址・5~6号土坑	25
第11図 3~4号土坑・1~2号小穴	26
第12図 7号土坑	26
第13図 8号土坑	26
第14図 1号性格不明遺構・9号土坑・ 3~4号小穴	27
第15図 10号土坑	27
第16図 1~2号溝	28
第17図 5号住居址	29
第18図 6号住居址・15号土坑	30
第19図 7号住居址	31
第20図 8号住居址	32
第21図 9号住居址(1)	33
第22図 9号住居址(2)	34
第23図 11~12号土坑	35
第24図 13~14号土坑	35
第25図 16~17号土坑	35
第26図 出土遺物(1)	36
第27図 出土遺物(2)	37
第28図 出土遺物(3)	38
第29図 出土遺物(4)	39
第30図 出土遺物(5)	40
第31図 出土遺物(6)	41

第32図 出土遺物 (7) .....	42	第38図 出土遺物 (13) .....	48
第33図 出土遺物 (8) .....	43	第39図 出土遺物 (14) .....	49
第34図 出土遺物 (9) .....	44	第40図 出土遺物 (15) .....	50
第35図 出土遺物 (10) .....	45	第41図 出土遺物 (16) .....	51
第36図 出土遺物 (11) .....	46	第42図 出土遺物 (17) .....	52
第37図 出土遺物 (12) .....	47	第43図 出土遺物 (18) .....	53

## 写真図版目次

- 図版1 A区全景（北から） A区全景（南から） A区土坑群 1・2号住居址  
1号住居址埋甕炉 2号住居址埋甕炉
- 図版2 3号住居址 3号住居址埋甕炉 3号住居址埋設土器 4号土坑 4号土坑  
土器出土状況 8号土坑
- 図版3 B区全景（南から） 5号住居址 5号住居址埋甕 6号住居址 7号住居址  
8号住居址
- 図版4 9号住居址 9号住居址ピット内土器出土状況 11・12号土坑 13号土坑  
14号土坑 14号土坑土器出土状況
- 図版5 1号住居址出土土器 1号住居址埋甕炉 2号住居址埋甕炉 2号住居址埋甕  
炉 3号住居址埋甕炉 3号住居址出土土器 3号住居址出土土器 3号住居址出土土製品
- 図版6 3号住居址出土土器 3号住居址出土土器 4号住居址出土土器 4号住居址  
出土土器 4号住居址出土土器 4号住居址出土石器
- 図版7 1号性格不明遺構出土土器 1号性格不明遺構出土石器 4号土坑出土土器  
A区出土土偶（正面） A区出土土偶（背面） 5号住居址埋甕 9号住居址  
出土土器 9号住居址出土土器
- 図版8 13号土坑出土土器 13号土坑出土土器 14号土坑出土土器 14号土坑出土土器  
人面部 14号土坑出土土器

# 第1章 調査に至る経緯及び調査方法

## 第1節 調査に至る経緯

駒平遺跡は山梨県東八代郡豊富村木原字駒平に所在し、曾根丘陵西側の一角に広がる台地平坦部に立地する。

今回の調査は国道140号線から県道甲府・玉穂・中道線へのアクセス道路である県代行事業の豊富村道シルクライン建設に伴うもので、豊富村教育委員会が山梨県石和土木事務所の委託を受けて行った。豊富村教育委員会が調査主体となって、平成7年度及び8年度に行った試掘調査の成果を生かしながら、調査区を設定し本調査を実施した。

平成9年(1997)12月15日 発掘調査を開始

平成9年(1997)12月18日 文化庁に発掘報告を提出

平成10年(1997)3月27日 発掘調査を終了

調査終了後、南甲府警察署に遺物の発見通知を提出

## 第2節 調査方法及び基本層序

調査区の設定は調査地内にある農道を挟んで北側をA区、道路の南側をB区と名づけて設定し、一辺5mのグリッド方式により調査を進めた。グリッドは2つの調査区が範囲内になるよう設定し、東西の軸をアルファベット(A・B・C…)、南北の軸を算用数字(1・2・3…)を用いて表記した。

調査方法は重機で遺構確認面としたローム面まで掘り下げた後、人力で遺構の検出に努め、調査を進めた。その結果、A・B区において縄文時代中期初頭の住居址が4軒、中期中葉の住居址が4軒、中期後半の住居址が1軒、初頭～中葉の土坑が17基、小穴が4基、性格不明遺構が1基、時期不明の溝が2本検出した。調査面積はA区が697.5m<sup>2</sup>、B区が495m<sup>2</sup>、全体で1192.5m<sup>2</sup>である。

また基本層序について、耕作土をI層、黒褐色土をII層とし、暗褐色土をIII層、黄褐色ロームをIV層とするが、耕作により大きく削平を受けたところもあり、必ずしも一定ではない。地表よりローム面までの深さはA区は50～70cm、B区は70～90cm程度である。

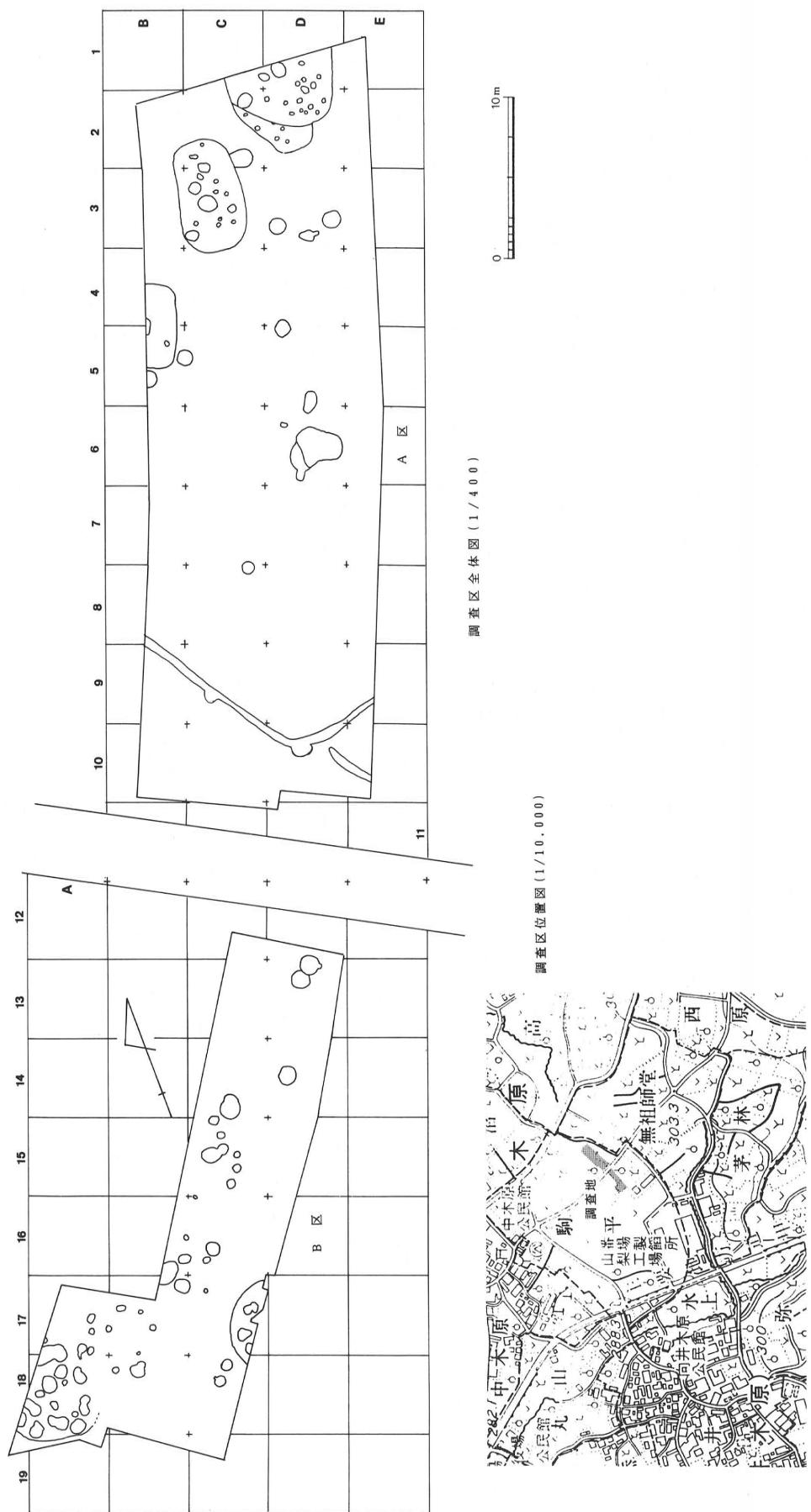
第I層 褐色土(耕作土)

第II層 黒褐色土

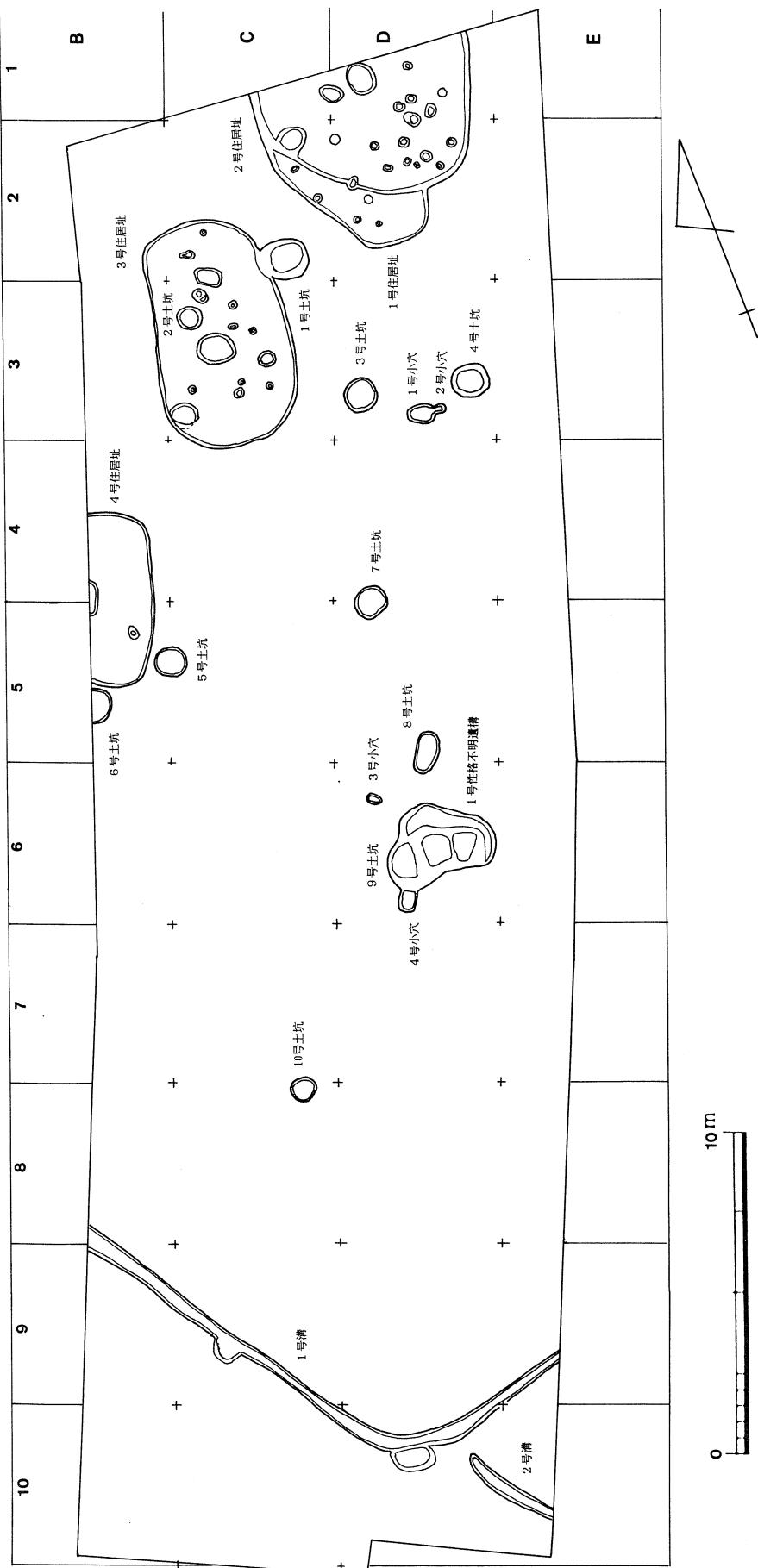
第III層 暗褐色土

第IV層 黄褐色ローム(地山)

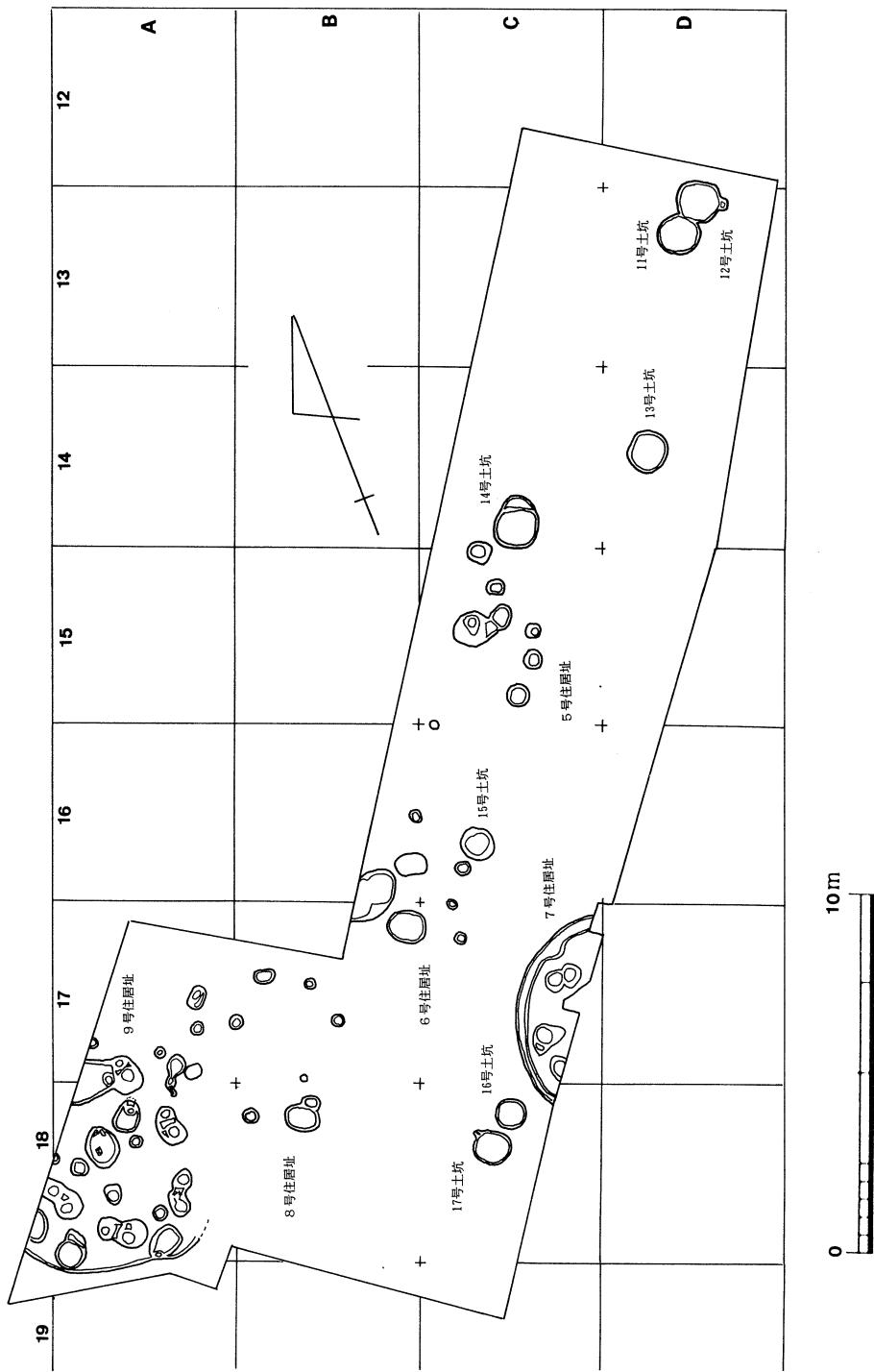
第1図 調査区位置図・調査区全体図



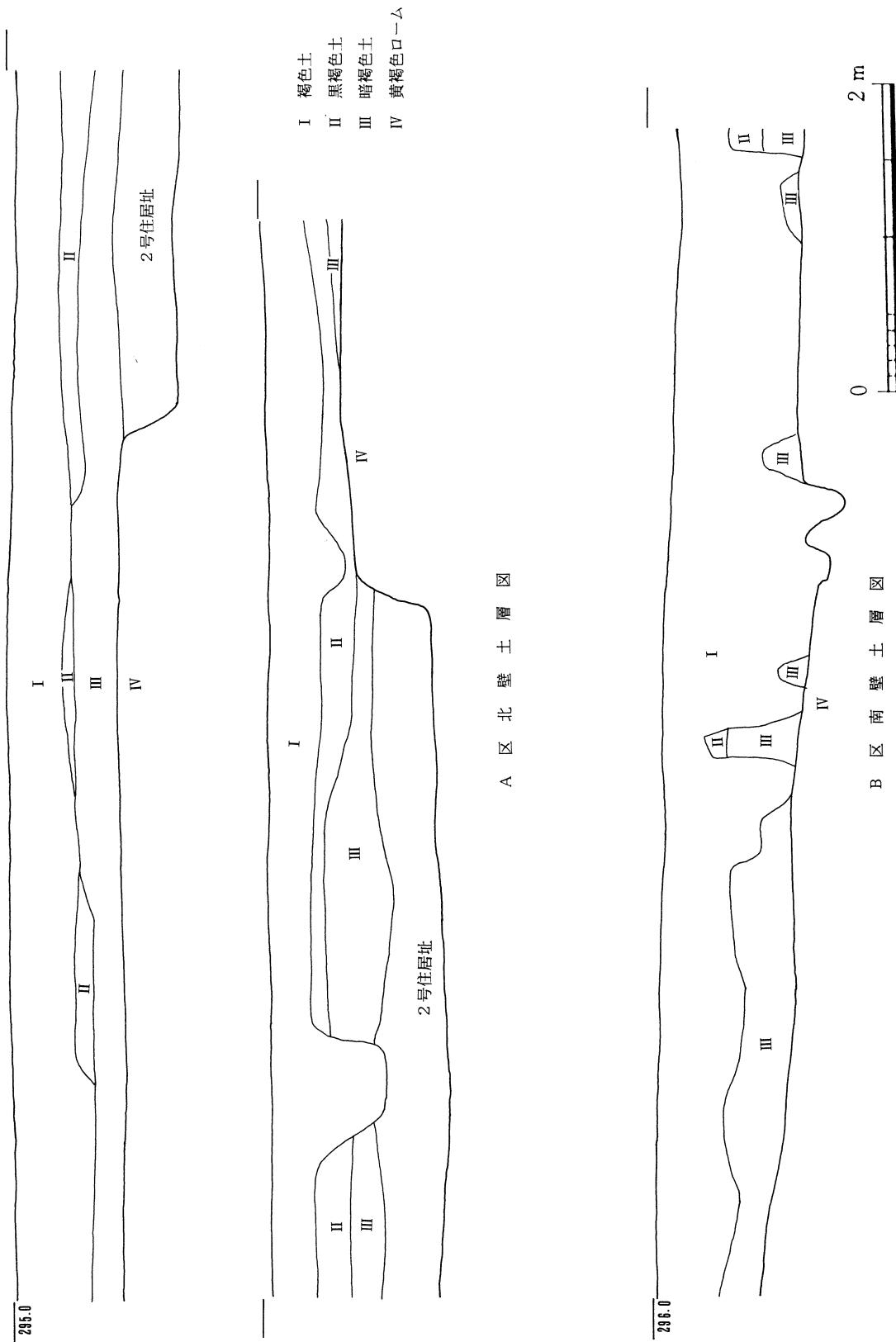
第2図 A区全体図



第3図 B区全体図



第4図 調査区土層図



## 第2章 地理的歴史的環境

豊富村は山梨県のほぼ中央、甲府盆地の南端に位置する。地形的には御坂山塊の北斜面の山地と曾根丘陵台地、浅利川流域の平坦地、及び笛吹川流域の沖積地とに分かれる。

村の南西は標高650～950mに及ぶ急峻な御坂山塊の北面斜面の山地に占められ、これらの山地から平地に移る尾根の末端部に標高240～380mで強粘土質からなるローム層で覆われた曾根丘陵が広がっている。本村の遺跡分布は主にこの曾根丘陵の台地上に位置する。今回調査した駒平遺跡も曾根丘陵の台地上の遺跡であり、各時代の遺構・遺物が出土している。

豊富村の初現の遺跡として、横畠遺跡や弥二郎遺跡から先土器時代のナイフ形石器が出土している。それに続く縄文時代の遺跡として、駒平遺跡は中期初頭～前半を主体とし、横畠遺跡は中期後半の住居址が検出された。また高部宇山平遺跡で後期中葉の土坑から注口土器の完形品が出土するなど、前期から後期にわたり遺構・遺物が検出されている。駒平遺跡のある木原区に分布する遺跡はほとんど縄文時代の散布地であり、曾根丘陵の台地上に立地する。

弥生時代の遺跡は城原遺跡で前期末～中期初頭の甕や壺の破片が採集され、これが村内の弥生土器としては最古となるものである。調査事例としては横畠遺跡で、昭和60年度に行われた調査で、後期の住居址が3軒、また平成3年に行われた試掘の際、溝状遺構から外面全体が赤彩され、胴部の上部に波状文を施した広口壺が出土したことがある。また弥二郎遺跡でも後期の住居址が3軒出土している。

古墳時代の遺跡として、高部宇山平遺跡では前期の方形周溝墓や中期の住居址が出土しており、また宇山平の台地状には王塚古墳や伊勢塚古墳が現存する宇山平古墳群、三星院の裏山に帆立貝式古墳の三星院古墳が現存する三星院古墳群、城原古墳群、三珠町側に赤鳥元年銘鏡が出土したことで知られる狐塚古墳が現存する田見堂及び鳥居原古墳群の計4つの古墳群が知られる。

奈良・平安時代の豊富村は『和名抄』によると、八代郡沼尾（ぬまのお）郷に属するとされるが、現在この沼尾郷に比定される遺跡は見つかっていない。横畠遺跡で奈良～平安時代に甲斐国内で盛んに作られた甲斐型土器が作られなくなる10世紀後半以降の住居址3軒が確認されているに過ぎない。

古代末期になると、沼尾郷の大部分が重なるとされる浅利郷が甲斐源氏の一族浅利与一義成の支配するところとなる。なお浅利郷の所在については建久2年(1191)の長講堂領目録（後白河天皇の娘宣陽門院の領地目録）にある青島荘の中に位置すると考えられており、青島荘は義成により立荘され、寄進された可能性もある。村内には大福寺にある層塔形式の浅利義成の墓塔をはじめ、浅利氏にかかわる伝承が各地に残る。また三星院門前の小丘が戦国時代の武田家臣三枝土佐守虎吉の館跡といわれる。中近世の遺跡として、横畠遺跡で16～17世紀にかけての竪穴状遺構や土坑・小穴群といっしょに陶磁器やかわらけ・内耳土器・融解物付着土器・鞆の羽口などが出土している。



- |              |            |            |              |
|--------------|------------|------------|--------------|
| 1. 明治遺跡      | 2. 地蔵田遺跡   | 3. 高部宇山平遺跡 | 4. 宇山遺跡      |
| 5. 中尾遺跡      | 6. 代中遺跡    | 7. 代中東遺跡   | 8. 関沢遺跡      |
| 9. 三枝氏館跡     | 10. 上野原遺跡  | 11. 駒平遺跡   | 12. 高内遺跡     |
| 13. 上三口西遺跡   | 14. 上三口遺跡  | 15. 弥二郎遺跡  | 16. 東原遺跡     |
| 17. 原遺跡      | 18. 中原遺跡   | 19. 浜井場遺跡  | 20. 付山南遺跡    |
| 21. 付山北遺跡    | 22. 神田南遺跡  | 23. 神田北遺跡  | 24. 旧三星院跡    |
| 25. 駒原遺跡     | 26. 柿戸原遺跡  | 27. 柿戸原南遺跡 | 28. 山口遺跡     |
| 29. 宮の下遺跡    | 30. 熊野原遺跡  | 31. 浅利氏館跡  | 32. 大鳥居宇山平遺跡 |
| 33. 釜池西遺跡    | 34. 釜池東遺跡  | 35. 浜井戸遺跡  | 36. 城原遺跡     |
| 37. 見間北遺跡    | 38. 見間遺跡   | 39. 捏田遺跡   | 40. 捏田北遺跡    |
| 41. 南大森遺跡    | 42. 西の沢遺跡  | 43. 宮の脇遺跡  | 44. 久保遺跡     |
| 45. 川東遺跡     | 46. 横畠遺跡   | 47. 久保田遺跡  | 48. 前田遺跡     |
| 49. 伊勢塚古墳    | 50~52. 無名墳 | 53. 三星院古墳  | 54~61. 無名墳   |
| 62. おさんこうじ古墳 | 63. 金塚古墳   | 64. 王塚古墳   | 65. 二子塚古墳    |
| 66~68. 無名墳   | 69. 城原大塚古墳 | 70~72. 無名墳 | 73. お御崎さん古墳  |



第5図 周辺遺跡分布図

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 A区の遺構と遺物

#### 1号住居址（第6・7・26図）

C・D-2に位置し、北側は2号住居址に切られている。全体的な平面プランは不明だが、おそらく橢円形を呈していたものと思われる。東西幅310cm以上、南北幅500cm以上、壁面の高さは10cmを測る。床面は平坦であり、5つの小穴が確認できた。円形もしくは橢円形プランで径15~30cm、深さは10~50cm。また2号住居址に切られる手前の南側に、炉体土器による炉址が残っていた。その土器は縄文時代中期初頭の集合沈線文による五領ヶ台I式土器である。土器は全周していた。住居の覆土は暗褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器の破片が15点ほど出土した。1が埋甕炉に使われた炉体土器で、集合沈線文。胴部径は最大で31.6cm。2は口径28.8cm。口縁部の文様帶は横方向の押引文。3は沈線文。4は底径20.0cmで、結節縄文。5は沈線文。

#### 2号住居址（第6・7・26~28図）

C・D-1・2に位置し、北側は調査区外に延びる。東西幅700cm、南北幅445cm以上、壁面の高さは40cmを測る。床面は平坦であり、16の柱穴ピットと2つの炉が確認できた。柱穴は円形もしくは橢円形プランで径20~50cm、深さは10~55cm。ただ西壁際にあるP3は長さが80~90cmある。炉は2つ確認でき、P1と名づけた炉のすぐ東側にP2と名づけた炉が作られており、その新旧関係は不明である。P1は地床炉で、東西幅が80cm、南北幅50cm、深さは10cmを測る。床面は平坦で、覆土は赤色焼土と暗褐色土の2層である。P2は東西幅80cm、南北幅105cm、深さ15cm。床面は南に向かってやや下がり、覆土は焼土が混じる暗褐色土である。炉内には北側に1つ、南側に1つ全周した炉体土器が正位に埋設されていた。7は北側の土器であり、縄文地に沈線で文様を描き、胴部上半部位である。6は南側の土器で、口縁部から胴部上半部位にかけてであり、口径約30cmで残存高19.4cmである。口縁部の文様帶は押引により、区画を描き、その中に横位の5~6本の平行沈線を引き、胴部は縄文地に沈線文である。いずれも縄文時代中期初頭の後半にあたる土器であり、2つの土器が炉として使われた際の時期差は不明である。住居の覆土は黒褐色土、暗褐色土、褐色土、明褐色土の4層に分かれる。明褐色土はP2の炉の付近にあり、P2の覆土ともいえる。

出土遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器や石器が多数出土した。8は口径28.0cmで、縄文地に沈線文。9は口唇部に細沈線文帯。10は沈線文で、口唇部は縄文帯。11は縄文地に複合鋸歯文。12は沈線文。13は沈線文で、口唇部は縄文帯。14は沈線文。15は沈線文で、口唇部は縄文帯。16は沈線文で、口唇部は縄文帯。17は複合鋸歯文や連続爪形文、沈線文。18は沈線文。19は半截竹管によるマス目状の沈線文。20は四角い透孔のまわりに連続爪形文を埋める。21は口縁部に4本の粘土紐を貼り付け、その上を押引する。22は縄文地に沈線文。23は縄文地

に沈線文。24は底径15.6cmで、結節縄文。25は打製石斧で、粘板岩製。26は打製石斧で、粘板岩製。長さは10.1cm。27は凹石で、安山岩製。長さ11.2cm、幅5.4cm、厚さ5.0cm。28は凹石で、安山岩製。長さ12.4cm、幅7.0cm、厚さ4.4cm、29は石鏸で、黒曜石製。長さ1.3cm。30は土製円盤で、長さ3.5cm。縄文地に沈線。

### 3号住居址（第8・9・28～31図）

B・C-2～4に位置し、C-3区内に2号土坑が掘り込まれている。東西幅700cm、南北幅400cm、壁面の高さは7～10cmを測る。床面は平坦であり、14のピットや土坑、炉が確認できた。柱穴と思われる小穴は11個確認でき、円形もしくは橢円形プランで径20～50cm、深さは10～50cm。P1と名づけたものは住居内の南西コーナー部にあり、東西幅90cm、南北幅70cm、深さは55cmを測る。底面は平坦で、南壁はオーバーハングする。形状から貯蔵穴と思われる。炉はP7と名づけたもので、東西幅120cm、南北幅100cm、深さは10cmを測る。床面は平坦で、覆土は赤色焼土と暗褐色土の2層である。炉内には東側に1つ、西側に1つの炉体土器が埋設されていた。31は東側の土器で、縄文地に沈線で施文されており、胴部上半部位である。32の西側の土器も胴部上半部位にあたる部分で、口縁部に複合鋸歯文を廻らし、隆線や押引文で文様を描く。東側の土器は炉の床面に置いただけだが、西側の土器は床面に穴を掘って据えていた状態であった。いずれも縄文時代中期初頭の後半にあたると思われる土器であり2つの土器が炉として使われた際の時期差は不明である。またP12としたピットは東西幅80cm、南北幅55cm、深さは15cmを測り、床面は平坦である。口縁部から胴部上半部位にかけての33の土器をピット内の中央よりやや東寄りに置かれた状態で見つかった。覆土は暗褐色土で、焼土は若干含まれていたが、炉として使われていたような土ではなく、土器も煤や灰の付着がなく、火を使用した痕跡が見られないことからこの土器は炉ではなく、埋甕ではなかったかと思われる。ただしP12の位置が住居の壁よりだいぶ離れて掘られており、埋甕とするには若干の疑問が残る。また中期初頭という時期に埋甕という習俗がすでに存在していたかどうかも問題である。33は口径25.4cmで、口縁部に一対の両耳把手がつく。全体的に沈線で施文。住居の覆土は暗褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器や石器が多数出土した。34は口径24.0cm、沈線文及びY字形刻文。35は底径16.2cmで無文。36は複合鋸歯文で、口唇部に蛇の装飾がある。37は複合鋸歯文やY字形刻文で、口唇部に蛇の装飾がある。38は人面付き土器の顔面部で、顔面を隅丸逆三角形の粘土板で作り、目はV字形の粘土を貼り付け、その上に逆ハの字に棒状工具で沈線を引く。目の上には円形刺突が2段に並んでいる。口は棒状工具で沈線を引く。39は口唇部に連続爪形文を刻み、その下部に複合鋸歯文やY字形刻文を施す。40は押引文。41は沈線文。42はY字形刻文や沈線文。43は凹石で安山岩製。長さ11.9cm、幅7.0cm、厚さ3.6cm。44は凹石で、玄武岩製。長さ11.0cm、幅8.0cm、厚さ5.0cm。45は凹石で、玄武岩製。長さ11.6cm、幅5.9cm、厚さ4.8cm。46は石匙で、泥岩製。長さ4.9cm、幅5.0cm、厚さ0.9cm。47は石鏸で、黒曜石製。長さ1.3cmである。48は土偶の脚部で、長さ4.5cm、幅3.5cm、高さ2.7cm。49～51は

土製円盤。49は長さ3.4cm。50の長さ3.1cm。51は縄文地で、長さ3.2cm。

#### 4号住居址（第10・31～33図）

B-4・5に位置し、西側は調査区外に延びる。東西幅190cm以上、南北幅520cm、壁面の高さは5～20cmを測る。床面は平坦であり、1つの柱穴と1つの炉が確認できた。柱穴と思われる小穴は楕円形プランで東西幅25cm、南北幅35cm、深さは50cm。炉は住居内のほぼ中央部に位置するものと思われ、地床炉である。東西幅35cm、南北幅110cmで、深さは10cmを測る。底面は平坦で、覆土は赤色焼土がつまっていた。

出土遺物は住居の覆土から、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式土器や石器が多数出土した。52は口径28.0cm。口縁部に複合鋸歯文や連続爪形文、縦位の条線をめぐらし、胴部は複合鋸歯文や斜格子文を入れる。53は口径28.0cm。口縁部に3本の刻目隆帯をめぐらし、その下部は複合鋸歯文を含む平行沈線。54は刻目隆線。55は口唇部に複合鋸歯文をめぐらし、その下部が縦位の条線。56は条線文。57は垂下沈線や平行沈線。58は複合鋸歯文や平行沈線。59は口唇部に縄文帶。60は縦位の条線。61は複合鋸歯文。62～64は浅鉢の口縁部で、内面に3～4列の連続爪形文を入れる。65～68は凹石で、安山岩製。67の長さは14.0cm。68の長さは12.5cm。69は石皿で、安山岩製。残存長16.7cm、残存幅19.7cm、厚さ5.5cm。

#### 1号土坑（第8図）

C-2に位置し、西側は3号住居址に切られている。楕円形プランを呈し、東西幅150cm、南北幅120cm、深さ40cmを測る。床面は平坦であり、覆土は暗褐色土である。

出土遺物はない。

#### 2号土坑（第8・33図）

C-3に位置し、円形プランを呈する。径90cm、深さ15cmを測る。床面は平坦であり、覆土は黒色土である。

出土遺物は縄文時代中期初頭～中葉の土器片が約20点の他、2点の打斧片や1点の石匙、黒曜石が出土した。70は沈線文。71は石匙で、泥岩製。長さ4.3cm、幅4.8cm、厚さ0.9cm。

#### 3号土坑（第11・33図）

D-3に位置し、円形プランを呈する。径100cm、深さ10cmを測る。床面は平坦であり、覆土は黒褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期初頭の土器片が20点ほど出土した。72は隆帯区画内に縄文。

#### 4号土坑（第11・33・34図）

D-3に位置し、楕円形プランを呈する。東西幅115cm、南北幅100cm、深さ10cmを測る。床面は平坦であり、覆土は暗褐色土で焼土粒や炭化物が混入している。

出土遺物は縄文時代中期初頭の土器がいくつか出土したが、78は土器の胴部を半分にし、外面を上に向かた状態で出土し、甕被りの可能性がある。文様の特徴としては、沈線による斜格子文や平行沈線、複合鋸歯文で文様を構成する。73は口縁部の装飾の一部と思われる。74は複合鋸歯文。75は複合鋸歯文の下部に斜格子文。76～77は浅鉢で、口縁部内面に3～4列の連続爪形文を入れる。

#### 5号土坑（第10・34図）

D-3に位置し、円形プランを呈する。径90cm、深さ14cmを測る。床面は平坦であり、覆土は黒褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期初頭の浅鉢の口縁部など、土器片が約10点出土した。79は集合沈線文。80は浅鉢で、口縁部内面に3列の連続爪形文を入れる。

#### 6号土坑（第10・34図）

B-5に位置し、西側は調査区外に延びる。円形プランを呈するものと思われ、径110cm、深さ10cmを測る。床面は南側が少し上がる。覆土は黒褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期初頭の土器片が約20点の他、黒曜石と81の凹石も出土した。

#### 7号土坑（第12図）

D-4・5に位置し、ほぼ円形プランを呈する。径100cm、深さ10～15cmを測る。床面は平坦であり、覆土は黒褐色土である。

出土遺物はない。

#### 8号土坑（第13・34図）

D-5・6に位置し、楕円形プランを呈する。東西幅は70cm、南北幅140cm、深さは20cmを測る。床面は中央に向かって下がっていく。覆土は黒褐色土で焼土が混じる。

出土遺物は縄文時代中期初頭の土器で、その中には北側にまとまって同一個体の土器片が7つに分かれて出土した。82～83は集合沈線文。

#### 9号土坑（第13図）

D-6に位置し、東側は1号性格不明遺構に切られている。おそらく楕円形プランを呈するものと思われる。東西幅85cm以上、南北幅165cm、深さは50cmを測る。床面は平坦である。

出土遺物はない。

#### 10号土坑（第15・34図）

C-7・8に位置し、ほぼ円形プランを呈する。径80cm、深さ12～14cmを測る。床面は平坦であり、覆土は黒褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期中葉の土器片が約10点出土した。84は刻目隆線文。

#### 1号性格不明遺構（第14・34～36図）

D-6に位置し、西側は9号土坑を切っている。不定形プランを呈し、東西幅300cm、南北幅220cm、確認面より最深部まで95cmを測る。壁面は北から東にめぐる段とその東側の下部と2つの段がある。最深部の底面は東側が下がる。覆土は褐色土、黒褐色土、黒色土の3層で黒褐色土はさらに3つに細分できる。遺構の性格は不明で、風倒木の跡かもしれない。

出土遺物は縄文時代中期初頭の土器や石器が多数出土した。86は三角刻文で、口唇部に蛇の装飾がある。87は押引文。88は三角刻文。89は刺突文。90は沈線文。91は結節縄文。92は沈線文。93は斜格子状沈線。94は押引文。96は結節縄文で、底径が10.6cm。94は中期前半と思われる。95は凹みを多数もった石皿で、デイサイト製。残存長26.7cm、幅27.8cm、厚さ12.3cm。97は打製石斧で、粘板岩製。長さ9.4cm、幅4.0cm、厚さ1.2cm。98は石匙で、泥岩製。長さ3.7cm、幅4.9cm、厚さ0.8cm。

#### 1号小穴（第11・34図）

D-3に位置し、2号小穴と切り合っている。楕円形プランを呈する。東西幅85cm、南北幅60cm、深さは25cmを測る。床面は平坦であり、覆土は暗褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期中葉の土器が出土した。85は押引文。

#### 2号小穴（第11図）

D-3に位置し、1号小穴と切り合っている。楕円形プランを呈する。東西幅25cm以上、南北幅45cm、深さは15cmを測る。床面は東側に下がる。覆土は暗褐色土である。

出土遺物はない。

#### 3号小穴（第14図）

D-6に位置し、楕円形プランを呈する。東西幅40cm、南北幅28cm、深さは8cmを測る。床面は平坦であり、覆土は明褐色土で焼土が混じる。

出土遺物はない。

#### 4号小穴（第14図）

D-6に位置し、9号土坑と切り合っている。楕円形プランを呈する。東西幅50cm以上、南北幅65cm、深さは15cmを測る。床面は平坦である。覆土は黒褐色土で焼土が混じる。

出土遺物は縄文時代中期初頭の土器片が15点出土した。

#### 1号溝（第16図）

B～E-9・10に位置し、北西から南東に向かって走り、D-10区内で湾曲しながら、東方

向に走っていく。東西両側は調査区外に延びる。長さ16.5m、幅30~50cm、深さ20cmを測る。

出土遺物は縄文時代中期中葉の土器が混入していた。

#### 2号溝（第16図）

D・E-10に位置し、北西から南東に向かって走る。東側は調査区外に延び、長さ2.9m以上で、幅50cm、深さ30cmを測る。

出土遺物は縄文時代中期中葉の土器が混入していた。

99~103は磨製石斧である。100は表採だが、他はIII層出土である。99は蛇紋岩類製。100は結晶片岩製。長さ9.6cm、幅4.5cm、厚さ2.2cm。101は緑色岩製。102は蛇紋岩類製。長さ4.6cm、幅2.4cm、厚さ1.0cmである。片面の端に孔を穿とうとした痕跡が残る。103は蛇紋岩類製。104は土偶の胴部で、腕部も残る。文様は見られない。残存長は7.7cmである。時期は縄文時代中期初頭と思われる。D-10出土（第36図）。151は結節状沈線文で、前期後葉の諸磯C式。152は縄文地に連続爪形文で、前期末の十三菩提式。底径8.0cm。153~158はIII層出土で、中期初頭の五領ヶ台式。153はY字形刻文（第41図）。154は口縁部に3段の押引文を施す。口唇部には蛇（？）の顔の装飾を付ける。155は格子状沈線文。156は三角刻文。157は浅鉢で、4段の連続爪形文。158は浅鉢で、同心円状に押引きをする。159~160はII層出土で、中期前半の貉沢式。いずれも押引文。161~162はIII層出土で、中期前半の貉沢式。いずれも押引文。163はI層出土で中期末の曾利V式。ハの字文。164~167はIII層出土で、後期後半。164は6本の平行沈線。165~167は羽状沈線（第42図）。

## 第2節 B区の遺構と遺物

#### 5号住居址（第17・37図）

C-15・16に位置し、西側は調査区外に延びる。住居の壁面は耕作により削除されたためピットしか残ってなく、全体的な平面プランは不明である。ピットの範囲は東西幅235cm以上、南北幅540cmを測る。床面は平坦であり、6つの柱穴と1つの炉が確認できた。柱穴は円形もしくは楕円形プランで、径40~70cm、深さは20~60cm。炉は地床炉でP2の西隣にあり、東西幅100cm、南北幅95cm、深さ15cmで中央部がさらに16cmほど掘りくぼまれている。炉の覆土は黒褐色土、褐色土、赤色焼土、明褐色土の4層に分かれる。また南側のC-15・16にP8の埋甕が確認された。胴部位で、ほぼ全周しており、最大径22.2cm。106はその埋甕に使われた土器である。縄文時代中期後半で、縄文地に蛇行隆線で施文されたものだった。

ピットから出土した土器は縄文時代中期後半の曾利II式土器が主体である。105は重弧文である。P2出土。

#### 6号住居址（第18・37図）

B・C-16・17に位置し、西側は調査区外に延びる。住居の壁面は耕作により削除されたためにピットしか残ってなく、全体的な平面プランは不明である。ピットの範囲は東西幅375cm以上、南北幅370cmを測る。床面は平坦であり、6つの柱穴と1つの炉が確認できた。柱穴は円形もしくは楕円形プランで径25～40cm、深さは20～40cm。またP2のような径100cmの円形や長軸85cmの楕円形を呈するものもある。炉は地床炉で、調査区壁際にあり、西側は調査区外に延びる。東西幅100cm、南北幅125cm、深さ40cmを測る。覆土は黒褐色土と褐色土の2層に分かれる。ピットから出土した土器は縄文時代中期中葉が主体である。107は隆線の上を押圧している。P1出土。108は土偶の腕部で、P2出土。またP1から磨石も出土している。

#### 7号住居址（第19・37図）

C-17に位置し、東側は調査区外に延びる。東西幅180cm以上、南北幅530cm、深さは4cmを測る。床面は平坦であり、5つの柱穴が確認できた。柱穴は円形もしくは楕円形プランで径15～85cm、深さは15～75cm。炉は調査区外にあるものと思われ、確認できなかった。壁際には周溝が廻り、幅は25～35cmを測る。

出土遺物は縄文時代中期中葉の土器が主体である。109は隆線による渦巻文。

#### 8号住居址（第20・37図）

A・B-17に位置する。東側は調査区外に延びる。住居の壁面は耕作により削除されたためにピットしか残ってなく、全体的な平面プランは不明である。ピットの範囲は東西幅520cm、南北幅460cmを測る。床面は平坦であり、14の柱穴と1つの炉が確認できた。柱穴は円形もしくは楕円形プランで径20～95cm、深さは15～60cm。炉は地床炉で、円形に配列された柱穴内側のやや北西に位置する。楕円形プランで東西幅35cm、南北幅40cm、深さ20cmを測る。

ピットから出土した土器は縄文時代中期中葉が主体である。110は連続爪形文。111は縄文RL。

#### 9号住居址（第21・37～39図）

A-17・18・19に位置し、西側は調査区外に延びる。当初は調査区をA-18区までしか設定していなかったが、9号住居址が南側に延びることがわかり、A-19区まで拡張して調査を行った。住居の壁面は北側は耕作により削除されたためピットしか残ってなく、全体的な平面プランは不明だが、南側に拡張した部分には6cmほどの高さで壁が残存していた。A-19区に残る壁面から北側のピットまでの距離は615cm、また東西幅440cm以上を測る。床面は平坦で、20の柱穴と1つの土坑（P2）、1つの炉（P14）が確認できた。

柱穴は円形もしくは楕円形プランで径30～80cm、深さは15～90cm。またP7・P15・P21のような平面プランが楕円形のピットで、10～20cmほど掘り下げた後、柱を立てるための穴をピット内の中心部ではなく、壁際につくるものもある。

P 2とした土坑は北側に深さ15cmの張り出し部をもち、東西幅85cm、張り出し部を含めた南北幅105cm、深さ40cmを測る。急な立ち上がりで、床面は平坦である。覆土は褐色土と暗褐色土の2層で、褐色土の下部には焼土粒や炭化物が混入していた。この土坑より多数の土器が出土したが、その中で122の底部が残る胴部下半部の土器が正位で南側から出土している。

P 14とした炉は住居内の中心部にあるものと思われる。この炉址は平成8年度に行われた試掘調査の第19トレンチで一部確認されており、その全体が今回の調査で明らかとなった。楕円形プランで東西幅90cm、南北幅120cm、深さ14cmを測り、床面は平坦である。北壁際に長さ15～20cmが2つ、中央部のやや西寄りに長さ15cmが1つの計3つの礫を配する添石炉である。

出土遺物はピット内や住居の覆土から多数の土器や石器が出土し、ピットから出土する土器に縄文時代中期初頭が見られ、住居の床面直上から出土する土器は中期中葉が主体であった。112は半截竹管による沈線文で、五領ヶ台式。P 5出土。113～119は新道式。113は連続刺突により区画をつくる。P 6出土。114～115は連続爪形文。116は連続爪形文による三角区画。P 6出土。117は台付土器の脚部で、底径7.0cm。P 6出土。118～119は隆線内に連続爪形文や沈線文。120は刻目隆線区画内に刺突と刻目で文様を作る。藤内式。121～123は井戸尻式。121は縄文地に幅広のリングを貼り、その上に半截竹管で刺突文をめぐらす。122は刻目隆線文。底径19.6cm。P 2出土。123は口径27.7cm、底径12.4cm、器高33.0cm。口縁部の文様帶は沈線文、胴部下半部の文様帶は隆線による楕円区画内に縦位の沈線を入れる。遺構確認レベル面で出土。124～130は土製円盤である。124は沈線文で、長さ3.4cm。P 6出土。125は無文で、長さ3.2cm。P 6出土。126は縄文地に沈線で、長さ3.1cm。P 21出土。127は縄文地に沈線で、長さ2.8cm。128は無文で、長さ2.8cm。129は無文で、長さ3.3cm。130は無文で、長さ4.0cm。131は打製石斧で、粘板岩製。長さ12.0cm、幅5.3cm、厚さ2.3cm。132は打製石斧で、粘板岩製。長さ12.0cm、幅3.8cm、厚さ2.0cm。133は磨石で、玄武岩製である。長さ12.1cm、幅5.9cm、厚さ4.6cm。134は磨石で、安山岩製。長さ13.4cm、幅5.5cm、厚さ4.0cm。P 10出土。135は凹石で、玄武岩製。長さ10.4cm、幅7.7cm、厚さ3.8cm。P 9出土。136は凹石で、安山岩製。137は凹石で、安山岩製。長さ10.8cm、幅6.3cm、厚さ4.1cm。138は石匙で、泥岩製。長さ5.2cm、残存幅6.4cm、厚さ0.6cm。

### 11号土坑（第23・39図）

D-13に位置し、東側の一部が12号土坑に切られている。ほぼ円形プランを呈しており、東西幅115cm、南北幅105cm、深さは20～30cmを測る。急な立ち上がりで、床面は平坦である。覆土は赤褐色土である。

出土遺物は縄文時代中期初頭の土器片が9点出土した。139は結節縄文。140は半截竹管による沈線文。

### 12号土坑（第23・39図）

D-13に位置する。ほぼ円形プランを呈し、東西幅115cm、南北幅120cm、深さは15cmを測る。

床面はレンズ状に湾曲している。覆土は黒色土である。東側には20cm×25cmの方形プランで深さ10cmのピット状の張り出し部がある。当初は攪乱か土坑の壁が崩れただけの跡と考えたが、17号土坑もピット状の張り出し部をもち、12号土坑とそっくりなプランで確認されたことから土坑に伴うものと判断する。

出土遺物は縄文時代中期初頭の土器片が9点出土した。141は三角刻文。

#### 13号土坑（第24・40・41図）

D-14に位置する。ほぼ円形プランを呈しており、東西幅115cm、南北幅110cm、深さは18cmを測る。急な立ち上がりで、床面は平坦である。覆土は赤褐色土である。

出土遺物は浅鉢が2点、正位で重なり合って土坑の東側で出土した。142は上部の浅鉢で、波状口縁。外面と内面のいずれも無文だが、口唇部に把手状突起物を付ける。口径31.4cm、底径12.0cm、器高14.6cm。143は下部の浅鉢で、波状口縁である。上から見ると、正円ではなく、橢円形を呈する。内外面ともに無文だが、口唇部に大小8つの刻目を入れ、その下に突起物を1つ貼り付ける。口径30.0～34.9cm、底径11.0cm、器高13.0cm。145は縄文地で、底径12.4cmである。146は口径18.0cm、底径13.4cm、器高21.2cmを測る。口縁部の文様帶は押引文で、胴部は輪積痕の間に指頭状圧痕がめぐる。また押引文を垂下させる。北壁際で出土した。時期はいずれも縄文時代中期前半の猪沢式と思われる。

#### 14号土坑（第24・40・41図）

C-14に位置する。橢円形プランを呈しており、東西幅120cm、南北幅145cmで、北側に深さ20cmほどのテラス状の段をもち、南側に底面をもつ。底面は円形を呈する。南壁の高さは45cmを測る。急な立ち上がりで、床面は平坦である。覆土は褐色土と暗褐色土の2層である。ただし出土遺物からテラス状の段としたものが1つの土坑で、底面が円形の土坑に切られた状況が想定されるが、現場での土層観察では確認できなかった。したがって、2つの土坑が切り合っている可能性が高いが、遺物を一括で取り上げており、今回は1つの土坑としておく。

出土遺物は縄文時代中期初頭の人面付土器や中期中葉の土器、石匙が2点出土した。147の人面付土器はテラス面から口縁部が北に向いて出土し、色調は薄褐色を呈し、胎土も細かく、雲母の量は少ない。波状口縁で、口唇部に連続爪形文で飾る。口縁部付近に連続爪形文を施した隆帯を1本廻らし、またそれを垂下させたり、人面の下にY字状にして人体を表現しているものもある。また隆線の間は縄文地で、半截竹管やヘラ状工具による沈線で施文する。以上のような施文方法から東海系土器の北裏C式土器と判別できる。人面は口唇部の上に貼り付け、顔面を内側に向け、頭部は深くへこんでおり、後頭部に連続爪形文を廻らし、また連続爪形文を入れた隆線で眉と鼻を表現し、目は籠状工具で直線に描き、ややつり上がっている。口の表現はない。本来、顔は一対に作られたらしく、接合痕は残るがもう1つの頭部は見つかなかった。<sup>148</sup> 口径16.4cm、底径8.2cm、器高20.5cm。土坑床面から出土した146の土器は中期中葉の井戸尻式土器で、人面付土器とは時期が離れすぎており、従ってテラス状の段としたものは1つの

土坑であり、径120cmほどの円形土坑に切られた状況が読み取れる。<sup>148</sup>146は口径15.4cm、口縁部の全面に沈線で文様を描き、屈曲部に刻目をめぐらす。<sup>149</sup>148は石匙で、泥岩製。長さ4.7cm、幅5.2cm、厚さ0.9cm。<sup>150</sup>149は石匙で、泥岩製。長さ4.1cm、幅3.4cm、厚さ0.4cm。

#### 15号土坑（第18図）

C-16に位置する。平面プランはほぼ円形を呈し、東西幅85cm、南北幅90cm、深さは26~30cmを測る。急な立ち上がりで、床面は平坦である。覆土は褐色土である。6号住居址に隣接しており、住居内土坑の可能性もあるが、壁が削平されていて住居の範囲がわからぬいため、今回は単独土坑とした。

出土遺物は縄文時代中期中葉の土器片が9点ほど出土した。

#### 16号土坑（第25図）

B-18に位置する。平面プランは円形を呈し、径80cm、深さは4cmを測る。床面は平坦で、覆土は黒色土である。

出土遺物はない。

#### 17号土坑（第25図）

C-18に位置する。平面プランは円形を呈し、径95cm、深さは10~18cmを測る。床面は平坦で、覆土は黒色土である。南側には15cm×20cmの方形のピット状の張り出し部がある。

出土遺物は縄文時代中期中葉の土器片が6点と打製石斧が1点出土した。

168~177はIII層出土。168は底部で、木葉痕が残る。底径8.0cm。169~170はパネル文で、藤内式。171は口縁部にめぐらした隆帯の上を押圧する。井戸尻式か。172は円文を貼付し、その中心を刺突する。中期後半。173は竹管による刺突文。中期後半。174は結節縄文。口径28.0cmで、中期後半と思われる。175・176は隆線文で、中期後半と思われる。177は条線地に隆線文で、曾利II式。（第43図）

## 第4章 まとめ

調査の結果、A・B両区において縄文時代中期初頭の住居址が4軒、中期中葉の住居址が4軒、中期後半の住居址が1軒、中期初頭～中葉の土坑が17基、小穴が4基、性格不明遺構が1基、時期不明の溝が2本検出した。A区北側の区域では縄文時代中期初頭の遺構・遺物がほとんどであるが、A区南側からB区北側にかけて中期初頭と中期中葉が混在し、B区内では5号住居址のように中期後半の遺構もあるが、中期中葉が主体となる、という傾向が読み取れる。つまり集落が北から南へ次第に移動していったことが窺える。

## 第1節 住居について

A区で発見された住居址は4軒、B区で発見された住居址は5軒で、B区側は耕作が深く、住居の壁面が削平されて柱穴や炉のピットしか残っていないという例が多かった。

なお、平成7・8年度に行った試掘時に設定した13トレンチは今回の3号住居址、14トレンチは今回の4号住居址、19トレンチは今回の9号住居址に当たることがわかり、各トレンチから出土した遺物群は各住居址に伴うものと判断される。

A区検出の住居址は4軒で、すべて縄文時代中期初頭である。1号住居址の炉体土器の文様は集合沈線文であり、五領ヶ台I式に相当するが、2～4号住居址は炉体土器や覆土から出土した土器から五領ヶ台II式後半の時期になる。1～3号住居址の炉が地床炉内に土器を埋設した、いわゆる炉体土器を伴う埋甕炉である。また2・3号住居址の埋甕炉は1つの地床炉内に2つの炉体土器が据えられた状態で発見され、2号住居址では埋甕炉と地床炉の2つの炉址が見つかった。ただし、その時期差は不明である。

住居の配置について、1～4号住居址が調査区内では直線的に並んで建てられているように見えるが、多くの縄文時代の集落構造が同心円状に配置されていることからもわかるように、実際には1～4号住居址も同心円状に配置された住居址群の一部が確認されたのであって、その住居址群は調査区の北西方向に分布するのではないだろうか。

B区検出の住居址は5軒で、5号住居址が縄文時代中期後半の曾利II式期、それ以外は縄文時代中期中葉と思われる。5号住居址は壁面が削平されて正確なプランや規模は不明だが、南側に埋甕が確認され、その埋甕付近が南際と想像できよう。7号住居址は壁際に周溝をもつことが特徴である。今回の調査で、周溝を伴う住居址は本例だけである。9号住居址は当初設定した調査区より南側に延びることがわかり、A-18・19区の部分を拡張し、その範囲確認に努めた。拡張部分では壁面がかろうじて残存していて、9号住居址の南壁際を捉えることができた。出土した土器を見ると、五領ヶ台式～井戸尻式と幅広いが、P2から井戸尻式の全周した底部が出土していることから、時期は井戸尻式期と考えたい。

今回の調査で縄文時代中期初頭の住居址が4軒出土したが、本村では高部字山平遺跡で、平成9年度に個人住宅建設に伴う調査で縄文時代中期初頭の住居址が1軒出土し、この住居内の炉は地床炉で、その炉のすぐ南側に集合沈線文の五領ヶ台I式土器を埋設しており、その周囲には焼土が見られないで埋甕的性格と判断した、という調査事例がある。豊富村周辺の中道町や三珠町からも縄文時代中期初頭の土器は多数出土しているが、今回の調査成果は曾根丘陵西部地域における縄文時代中期初頭の良好な研究資料となるものであろう。

## 第2節 土坑について

今回の調査ではA区で10基、B区で7基の土坑が検出された。遺構の性格としてはごみ穴、貯蔵穴、墓壙などの性格が考えられ、明確な根拠をもつものはないのだが、ある程度遺物の出

土状況から推定することができる。

ほとんどの土坑が円形プランで、耕作により削平されたためか、深さが10cm前後のものが多い。覆土から出土する遺物量はそれほど多くなく、ごみ穴という印象は受けない。そうなると貯蔵穴もしくは墓壙の可能性が残るのだが、そこでいくつかの土坑内での遺物の出土状況を見てみると、4号土坑では西側に残存状況の良い土器が出土し、その土器は胴部外面を上に向けた状態で出土した。つまり凹面を下に向けており、本遺構を墓壙とするならば、死者の顔に土器を被せて埋葬した、いわゆる甕被葬といえないだろうか。しばしば縄文時代後・晩期で死者に浅鉢を頭に被せる例や近世の墓壙で死者に鉄鍋や焙烙を被せる例があるが、それを想起させるものである。甕被葬の古い例としては大阪府国府遺跡や神奈川県北川遺跡で前期の例が確認されており、中期の例としても東京湾岸の貝塚でいくつか例がある。したがって、本例が甕被葬の墓壙である可能性は十分にあると考えられる。

また8号土坑の北側に同一個体の土器片が7つまとまって出土したり、13号土坑の東側に浅鉢が2つ重なって内面を上に向けて出土したのは、その上に死者の頭をのせ、枕代わりにしていたと考えられないだろうか。13号土坑については下部の土器を枕代わりにして、上部の土器を鉢被せしたと考えられないだろうか。実際に骨片が出土していないため断定はできないが、いずれにしても遺物の出土状況から墓壙の可能性が高い。それからもう1つ、12号土坑や17号土坑のように壁面の一部が方形状に掘られ、土坑に付随するかのようにピットが検出される例がある。はじめは撹乱か風化等の自然的要因で壁が崩れただけかと思われたが、どうも故意につくられた小穴のよう切り合い関係ではなく、土坑と同時期のものらしい。確認面からの深さは浅いためか、その小穴から出土するものは何もなかった。ただこれらの土坑を墓壙とするなら、石や木など目印になるようなものを据えた跡、つまり墓標を据えた跡とは考えられないだろうか。しかしながら、以上のような解釈をしてみたものの、縄文時代中期の墓制に枕や墓標を据えるような習俗が存在していたかどうかを立証できる根拠は乏しく、もう少し同様な出土状況をもつ類例を集めが必要があり、今回は推測するにとどめておく。

14号土坑から出土した人面付土器は耕作により、土坑の上部が削平されたために土器の残存状況が悪いものと思われる。縄文時代中期初頭という時期の人面付土器は珍しく、県内では出土例がほとんどなく、白州町雜木遺跡から出土した縄文時代前期末の十三菩提式の人面付土器が最古で、本例はそれに続く資料であると思われる。人面付土器ということで、中期初頭における土偶研究にも参考となり得る資料である。また山梨県内の五領ヶ台式土器といえば、胎土に金色雲母が多く含有することが知られているが、本品は雲母の混入があまり見られず、在地の土器というより他県からの搬入品という印象が強い。連続爪形文を施した隆帯がめぐらされており、まさに東海系土器で、五領ヶ台式に併行する北裏C式の特徴を示すもので、山梨県外から搬入してきたものと思われる。

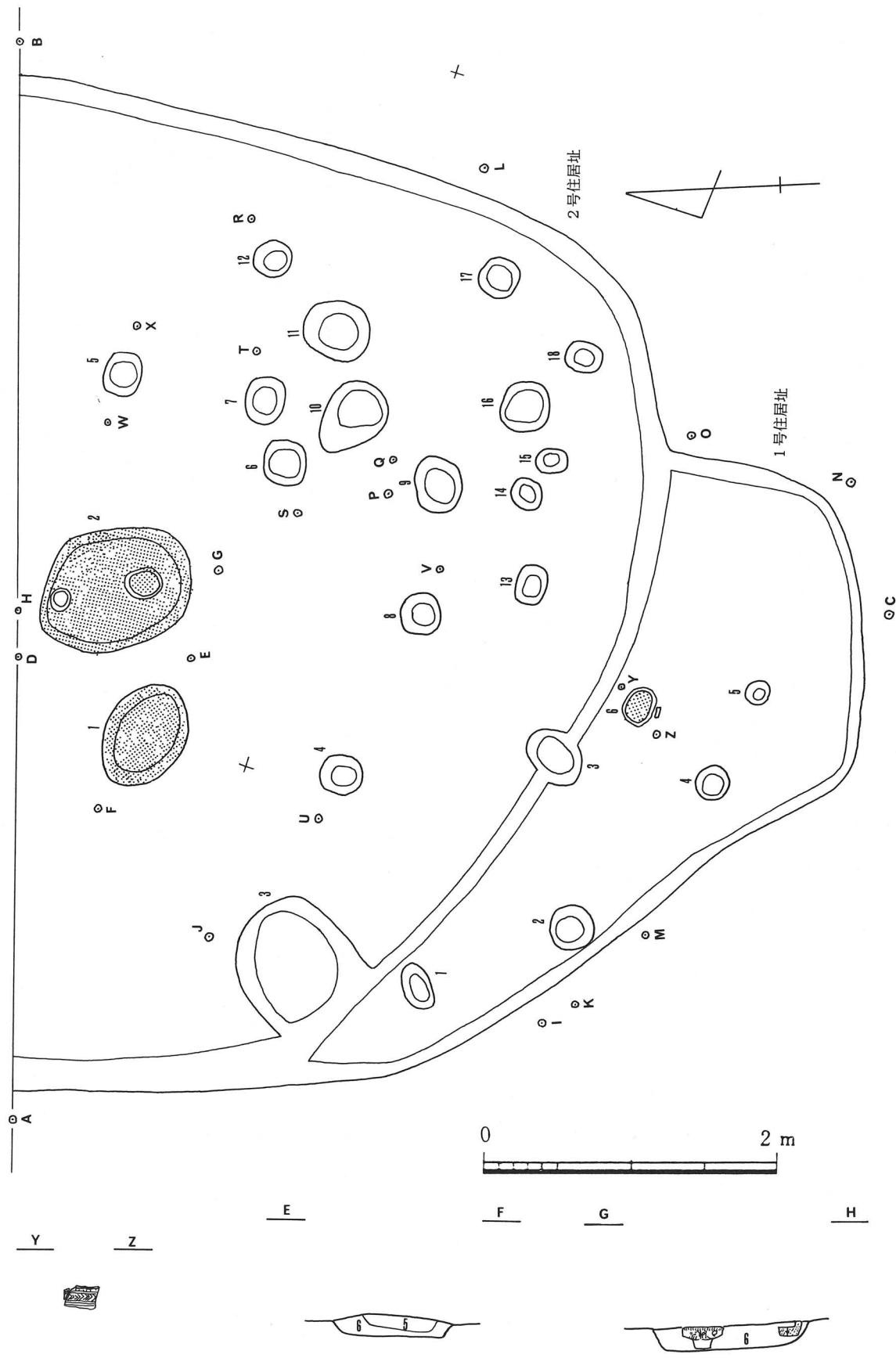
これまで山梨県内における縄文時代中期初頭の東海系土器の搬入状況は不明な点が多く、山梨県は空白地帯であったが、東海系土器の分布状況を知る上で貴重な発見であり、この方面的研究の一助となる資料であり、そういう意味からも学術的価値が高く、このような資料が出

土したことは大きな成果であった。

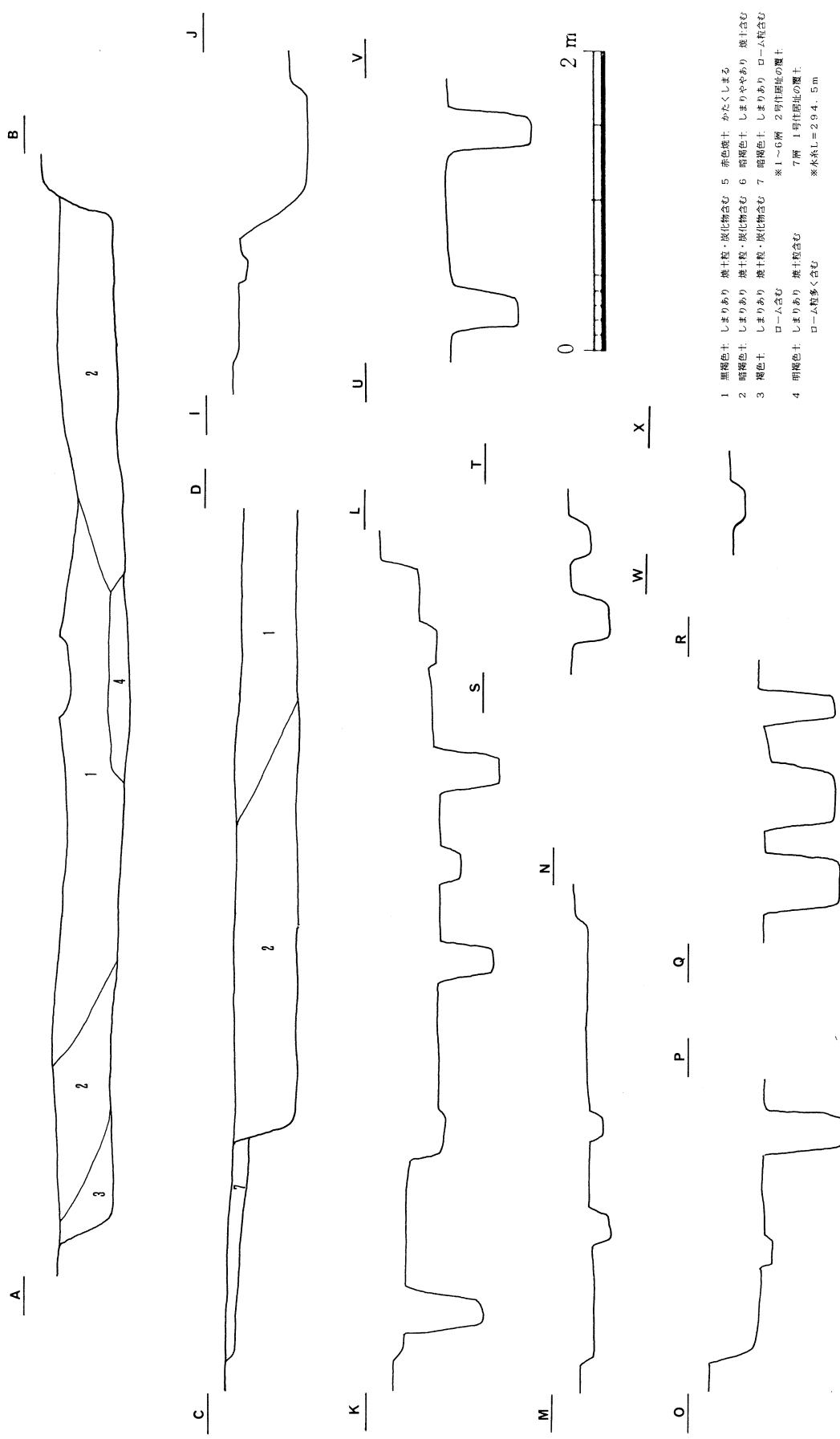
駒平遺跡は曾根丘陵の一角にある台地の平坦部に位置し、その周辺台地にも遺跡が多く分布し、同じ木原区内には駒平遺跡を含め11か所の縄文時代の包蔵地が確認されている。その中で駒平遺跡は中心的な集落であったと想像され、出土した遺構・遺物の質や量から木原区にとどまらず、豊富村内でも代表的な遺跡ともいえる。今回の調査で豊富村の縄文時代中期における集落構造の一端が明らかとなる成果を得ることができ、大変有意義な調査であったといえるであろう。

## 引用・参考文献

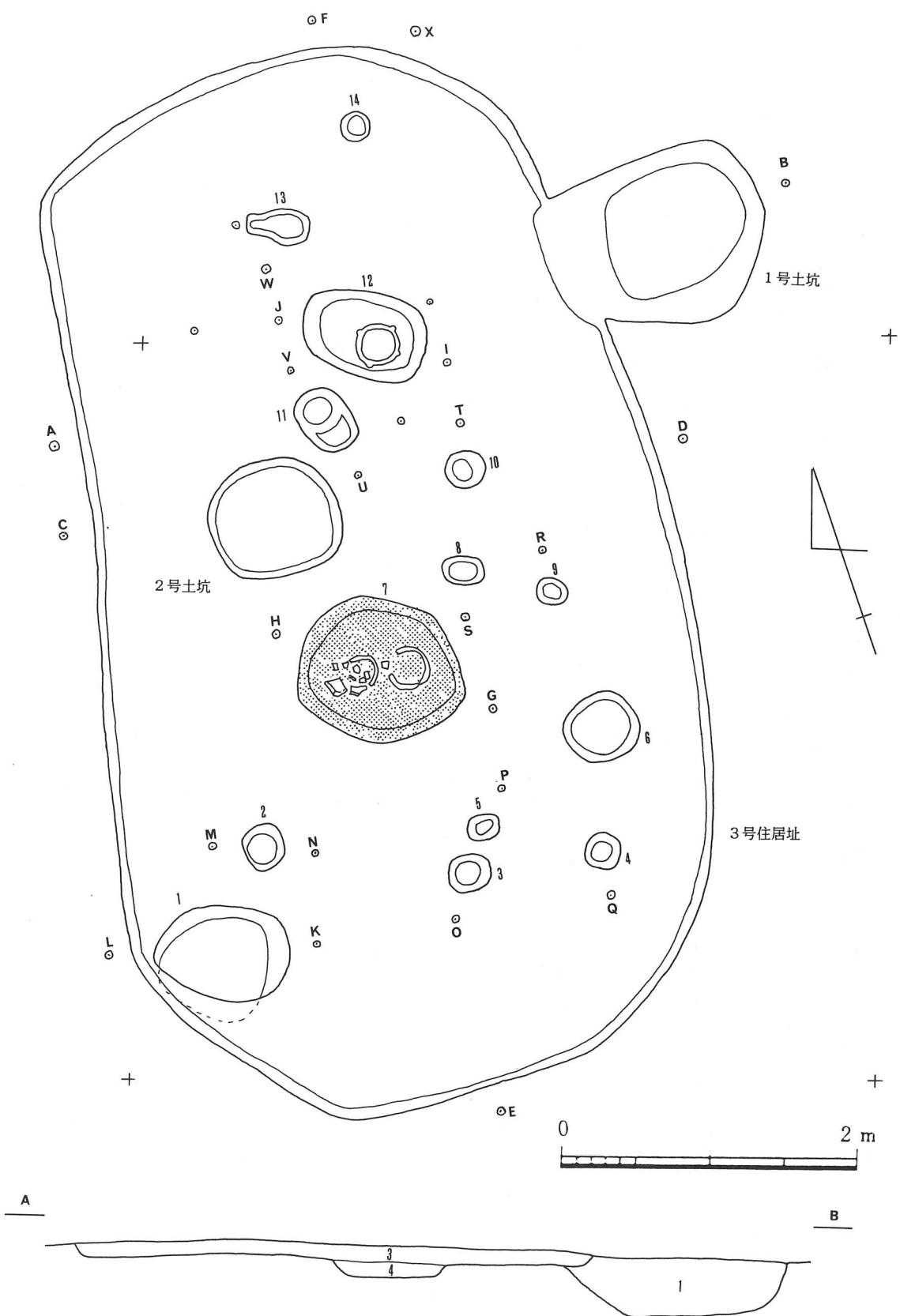
- 山梨県教育委員会 1977 『笛吹川沿岸土地総合改良事業地域内埋蔵文化財分布調査報告書』
- 今村啓爾 1985 「五領ヶ台式土器の編年－その細分及び東北地方との関係を中心に－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』4
- 千葉県文化財センター 1987 『房総考古学ライブラリー3－縄文時代（2）－』
- 小野正文 1987 『釈迦堂II』 山梨県教育委員会
- 小林公明他 1988 『唐渡宮』 長野県富士見町教育委員会
- 今福利恵 1990 「勝坂式土器土器様式の個性と多様性」『考古学雑誌』76-2
- 岡野秀典 1993 『高部宇山平遺跡』 豊富村教育委員会
- 縄文時代中期集落研究グループ他 1995 『縄文時代中期集落研究の新地平』
- 岡野秀典 1995 『高部宇山平遺跡II・浅利氏館跡・三枝氏館跡』 豊富村教育委員会
- 江戸遺跡研究会 1996 『江戸時代の墓と葬制』
- 長野県立歴史館 1996 『縄文人の一生－北村遺跡に生きた人々－』（1996年夏季企画展図録）
- 岡野秀典 1997 『平成7・8年度村内遺跡発掘調査報告書』 豊富村教育委員会
- 岡野秀典 1997 『遺跡詳細分布調査報告書』 豊富村教育委員会
- 竹田眞人 1997 「山梨県北巨摩郡内における縄文時代中期初頭（五領ヶ台式）土器群の編年『八ヶ岳考古』
- 中山真治 1997 「縄文時代中期初頭の西関東・中部高地における東海系土器－特に北裏C I式系の搬入土器をめぐって－」『東京考古』15
- 静岡県考古学会 1998 『縄文時代中期前半の東海系土器群』
- 榎原功一 1998 「山梨県の縄文時代中期土偶－有脚立像土偶の出現をめぐって－」『土偶とその情報』研究論集2
- 岡野秀典 1998 『平成9年度村内遺跡発掘調査報告書』 豊富村教育委員会



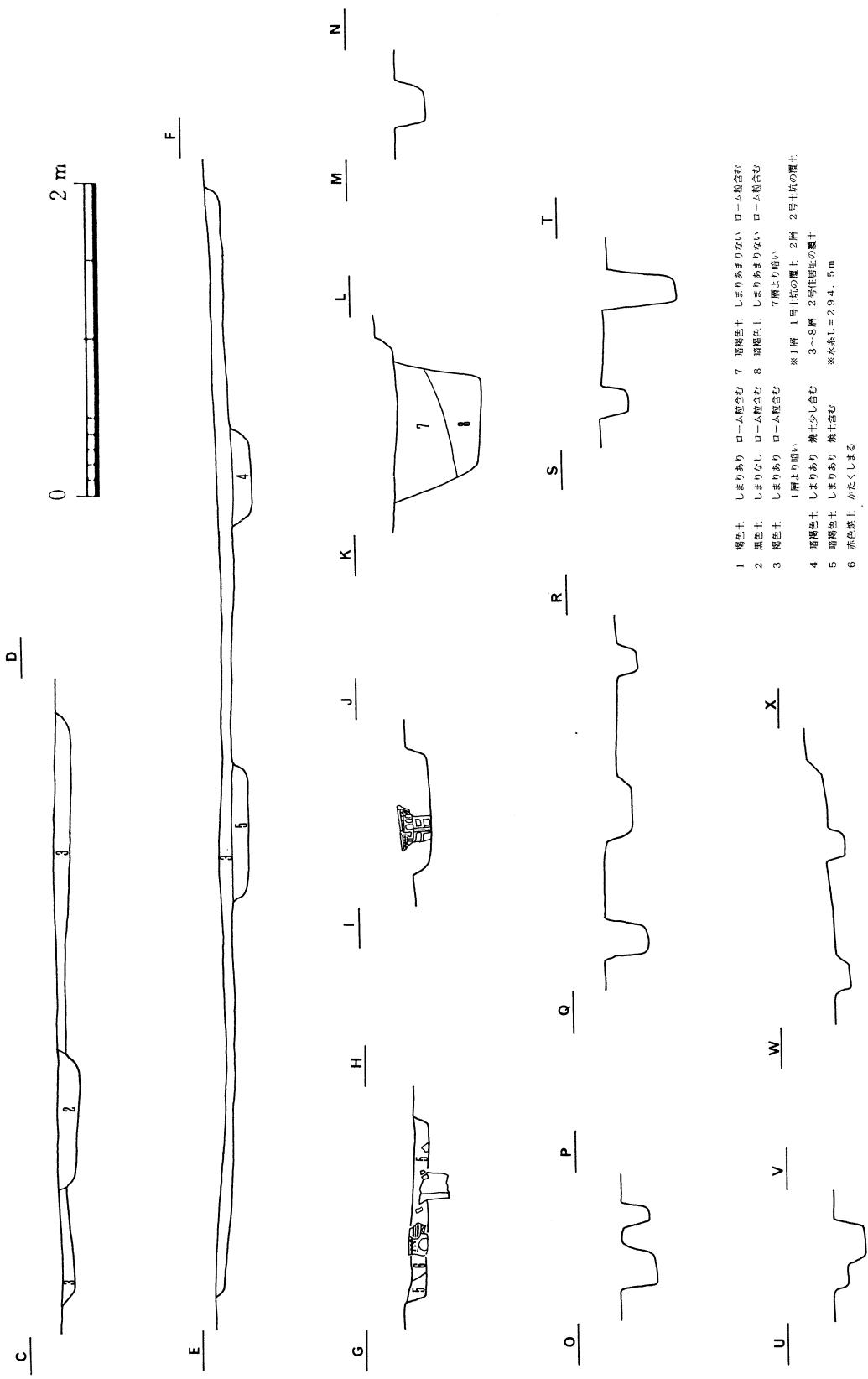
第6図 1・2号住居址(1)



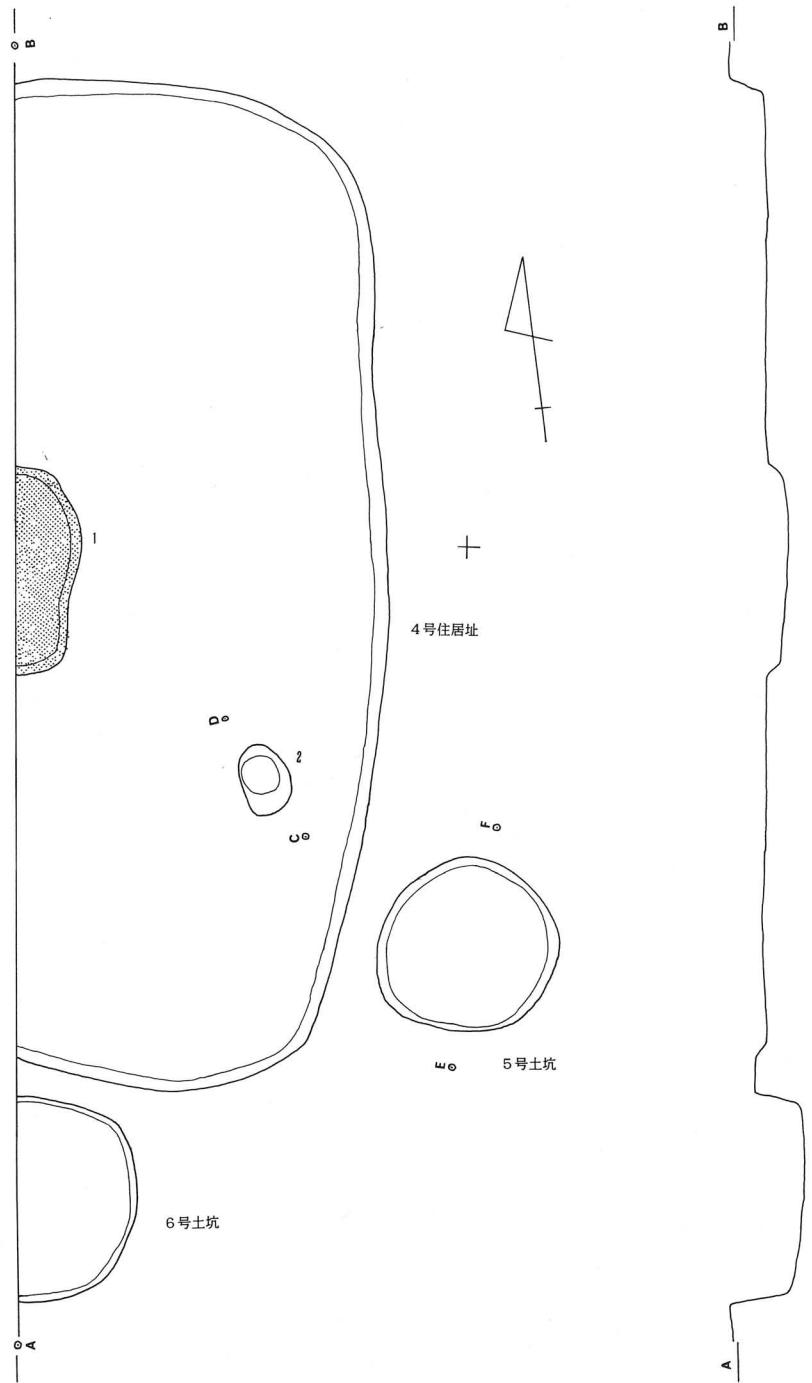
第7図 1・2号住居址(2)



第8図 3号住居址・1～2号土坑(1)



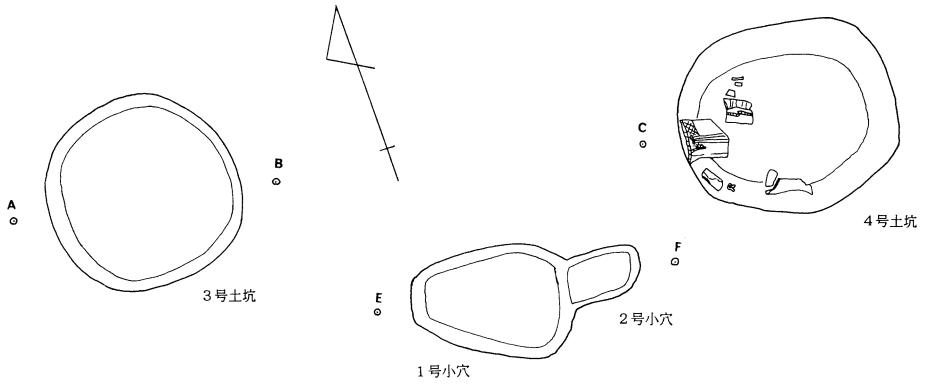
第9図 3号住居址・1~2号土坑 (2)



1 黒褐色土 しまりあまりない  
ローム粒・黒色土含む  
※水系L=294.5m

0 1m

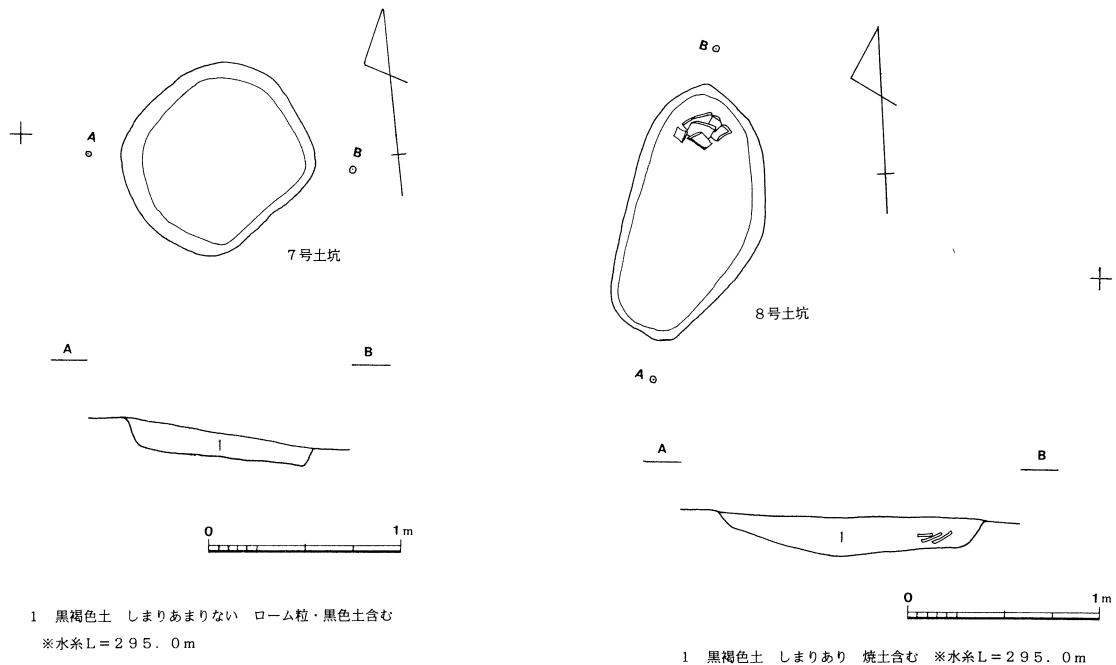
第10図 4号住居址・5～6号土坑



3~4号土坑  
 1 黒褐色土 しまりあまりない ローム粒・黒色土含む  
 3号土坑の覆土  
 2 暗褐色土 しまりあり 焼土粒・炭化物含む  
 ローム粒・黒色土含む 4号土坑の覆土  
 ※水糸L = 294.5 m

0 1m

第11図 3~4号土坑・1~2号小穴

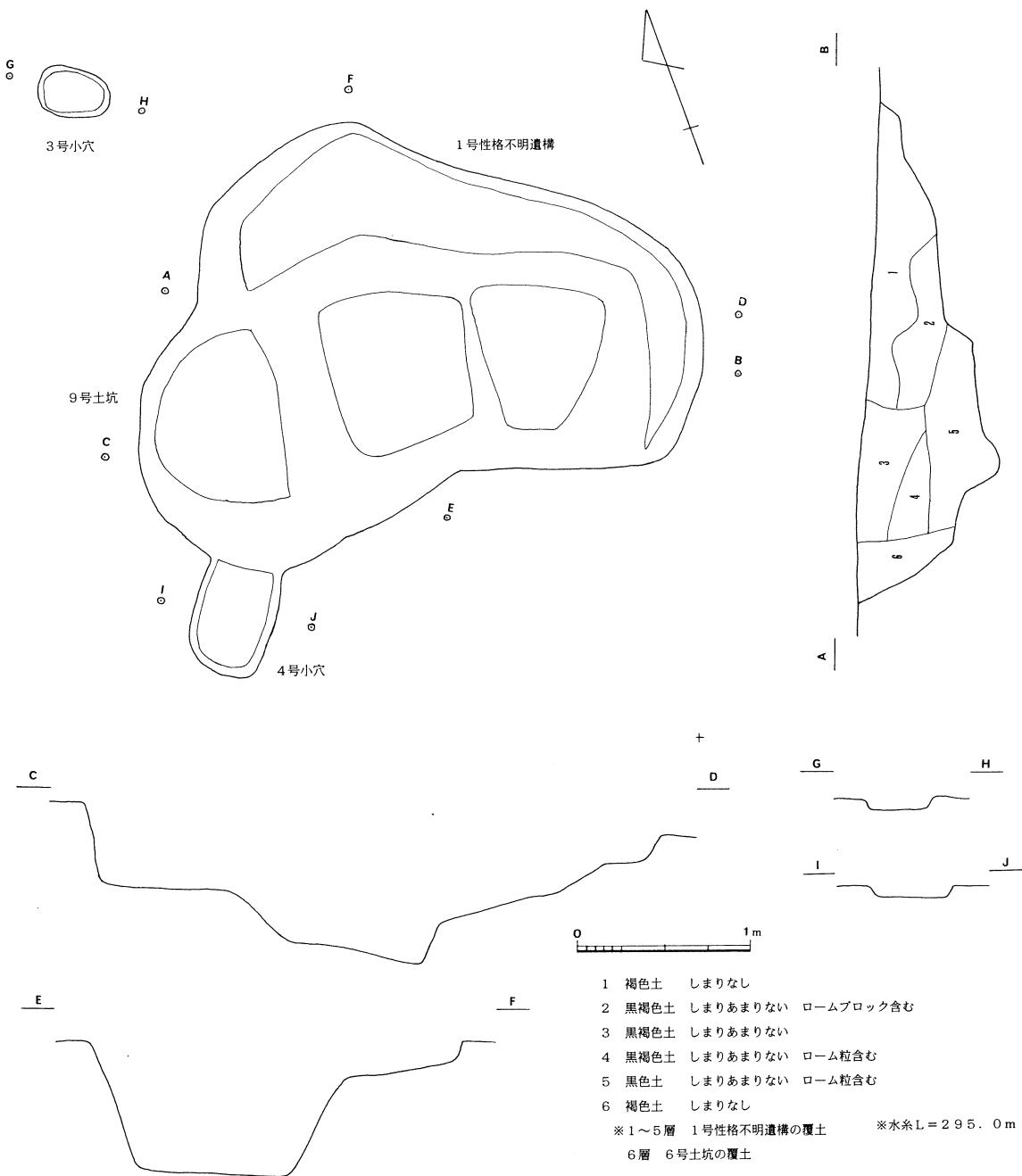


1 黒褐色土 しまりあまりない ローム粒・黒色土含む  
 ※水糸L = 295.0 m

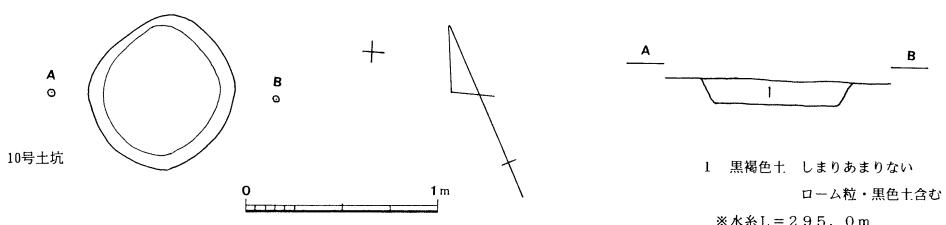
1 黒褐色土 しまりあり 焼土含む ※水糸L = 295.0 m

第12図 7号土坑

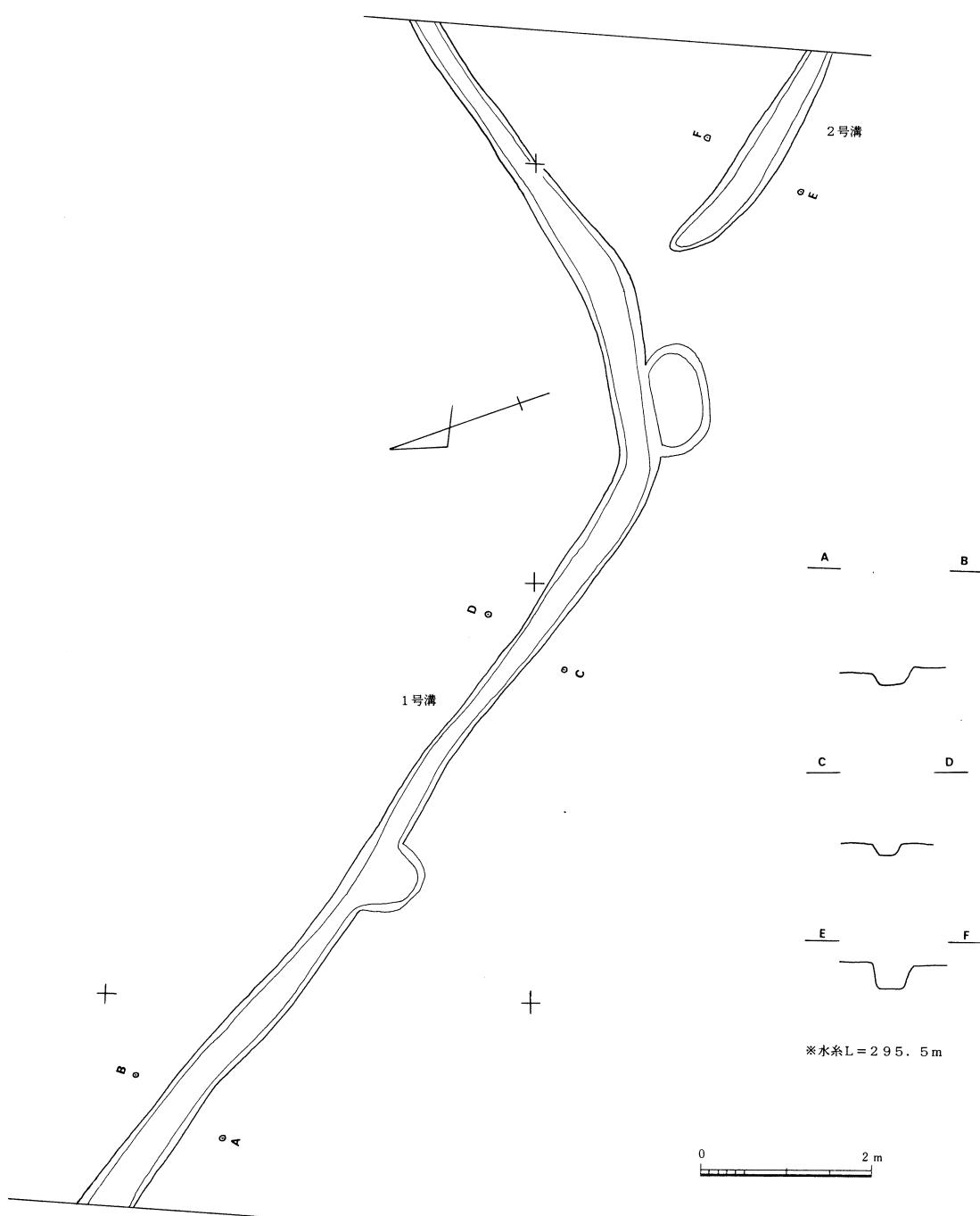
第13図 8号土坑



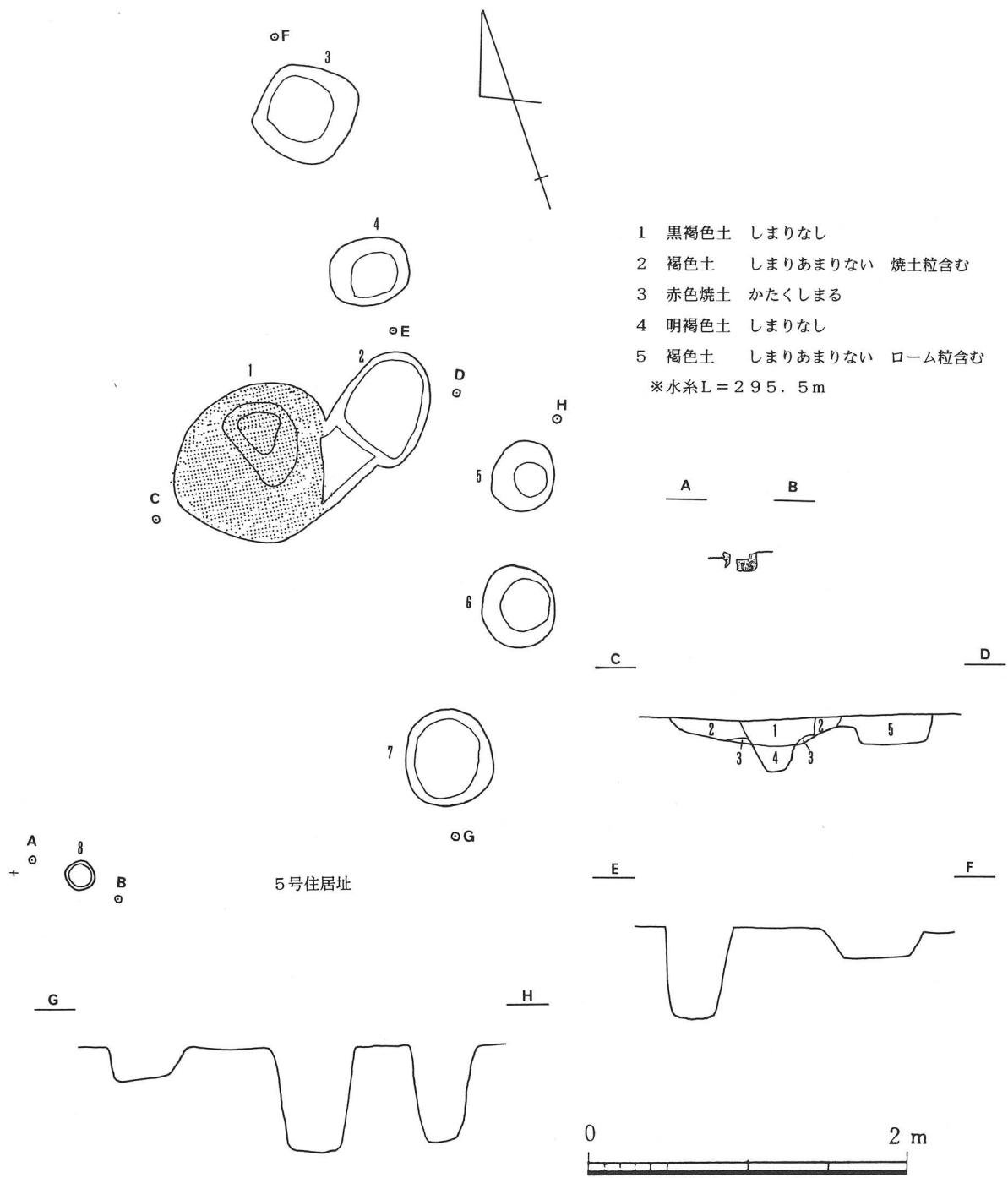
第14図 1号性格不明遺構・9号土坑・3～4号小穴



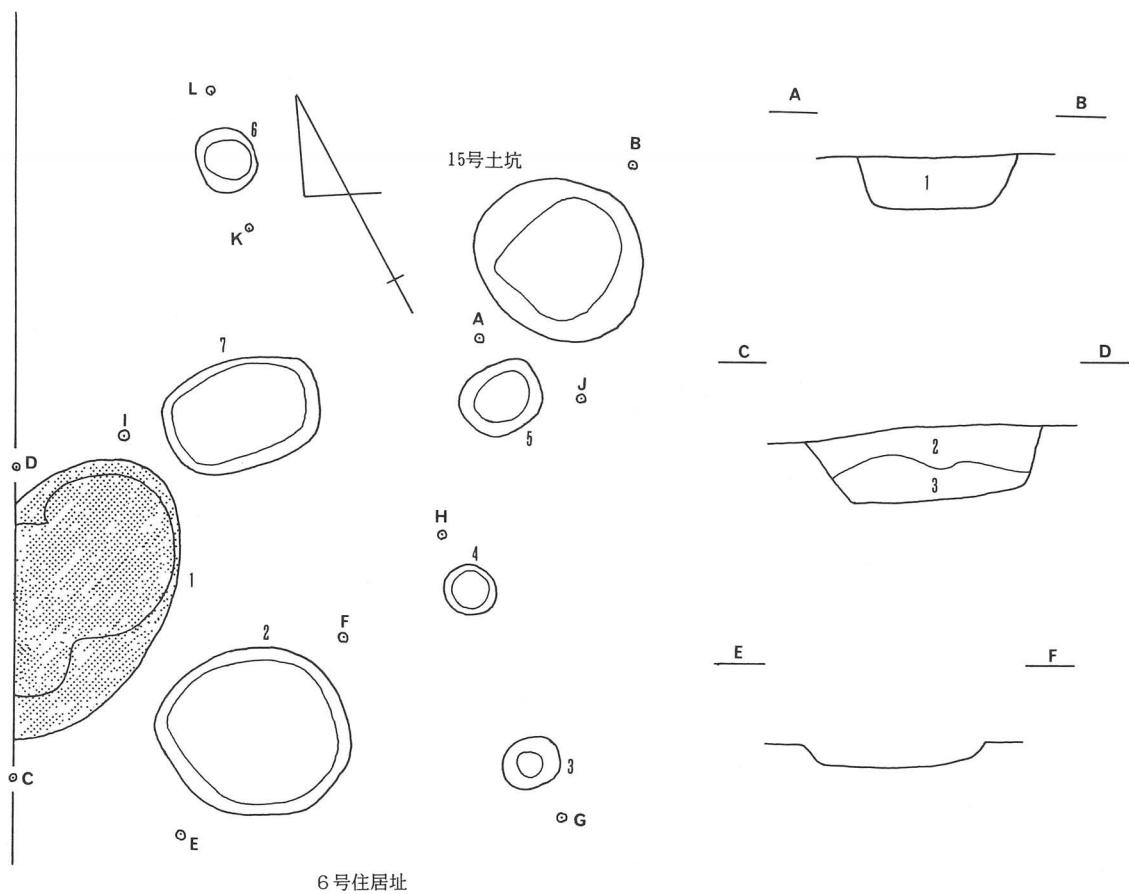
第15図 10号土坑

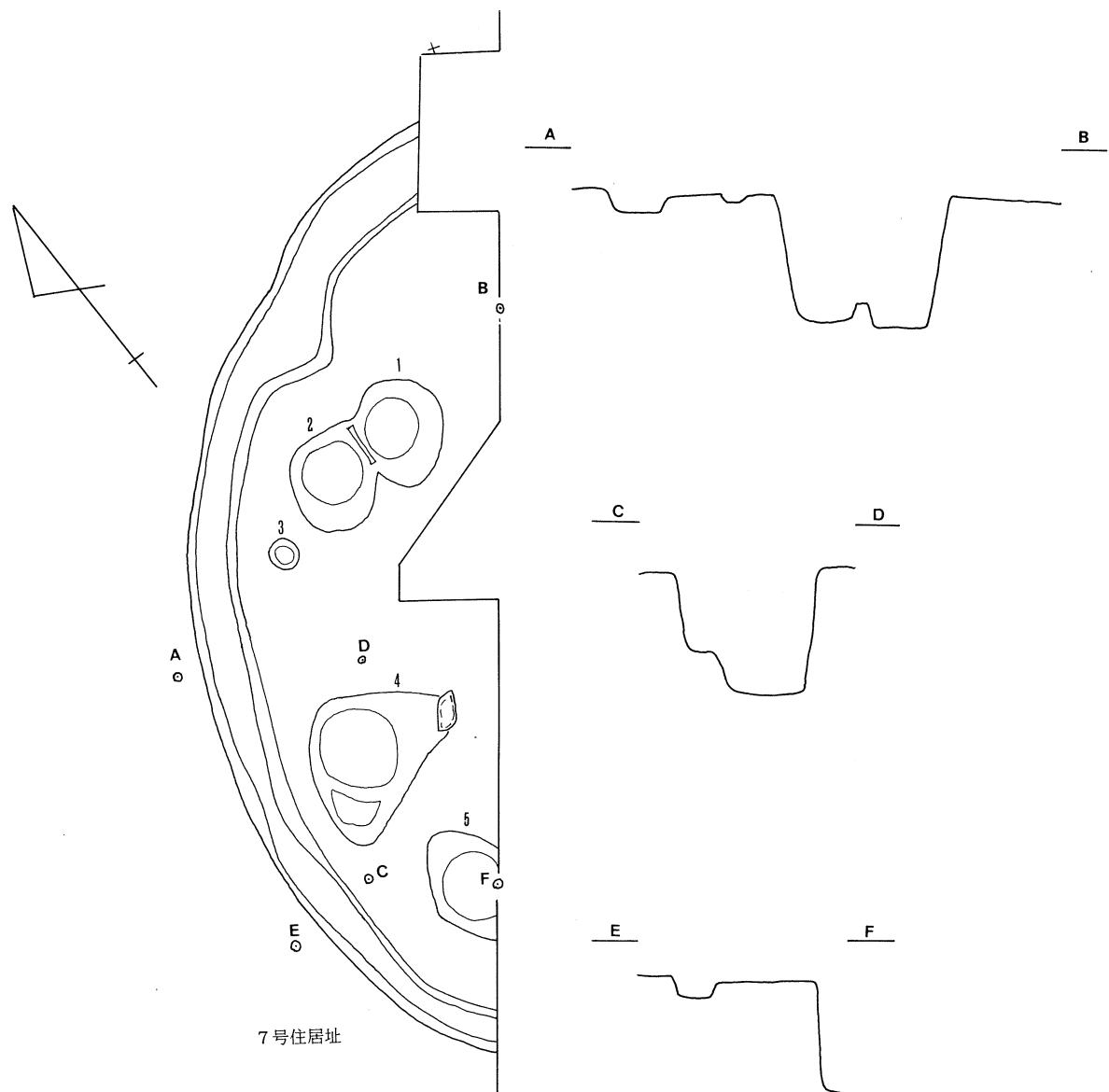


第16図 1~2号溝

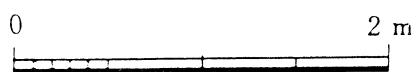


第17図 5号住居址

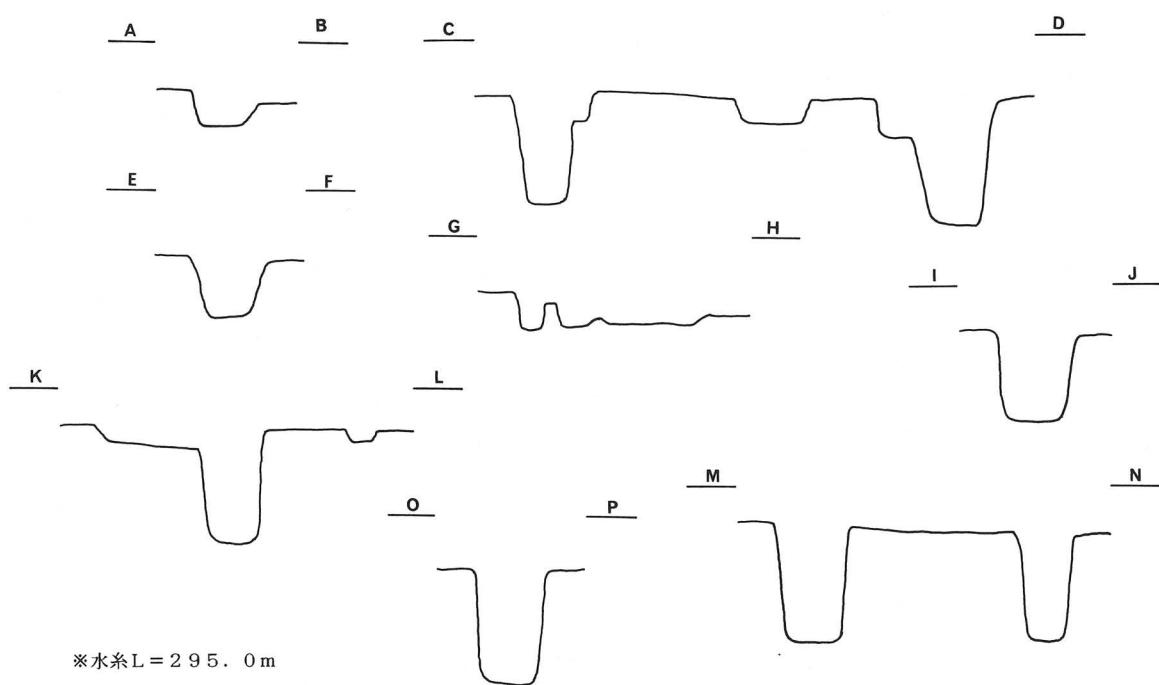
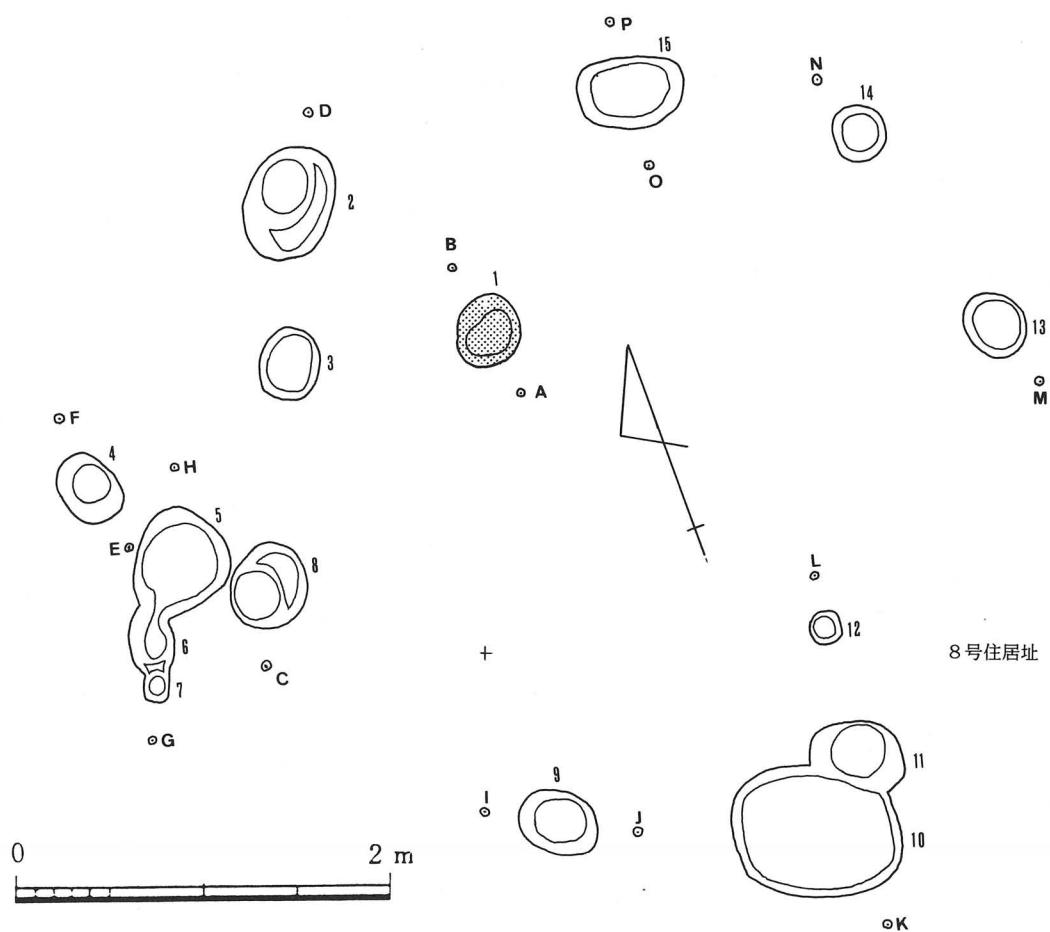




※水糸L = 295.5 m

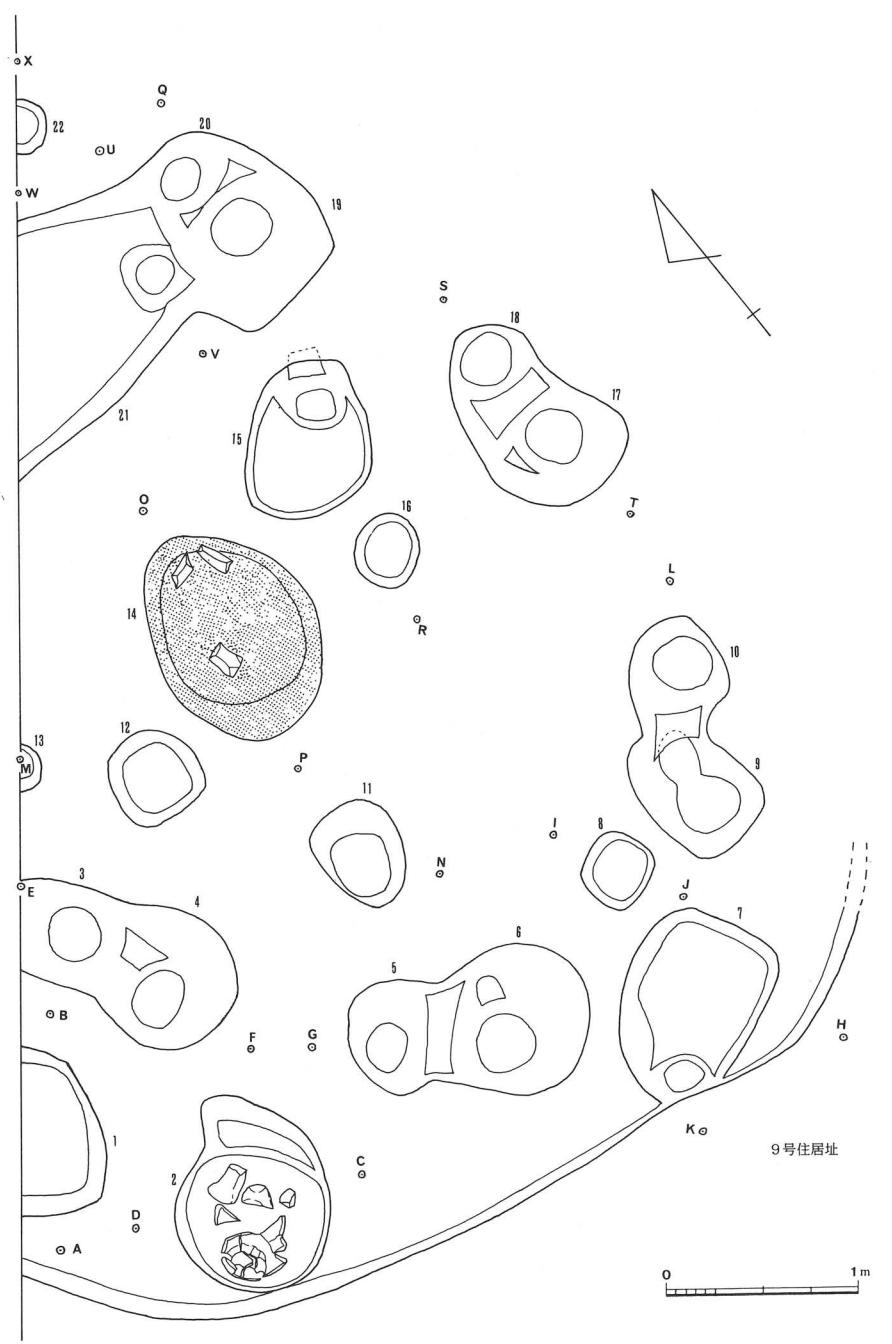


第19図 7号住居址

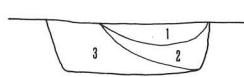


※水糸 L = 295.0 m

第20図 8号住居址



A                    B                    C                    D                    E                    F



1 褐色土 しまりあまりない

2 赤色焼土が全体的につまる 炭化物含む

3 明褐色土 しまりややあり ローム粒含む

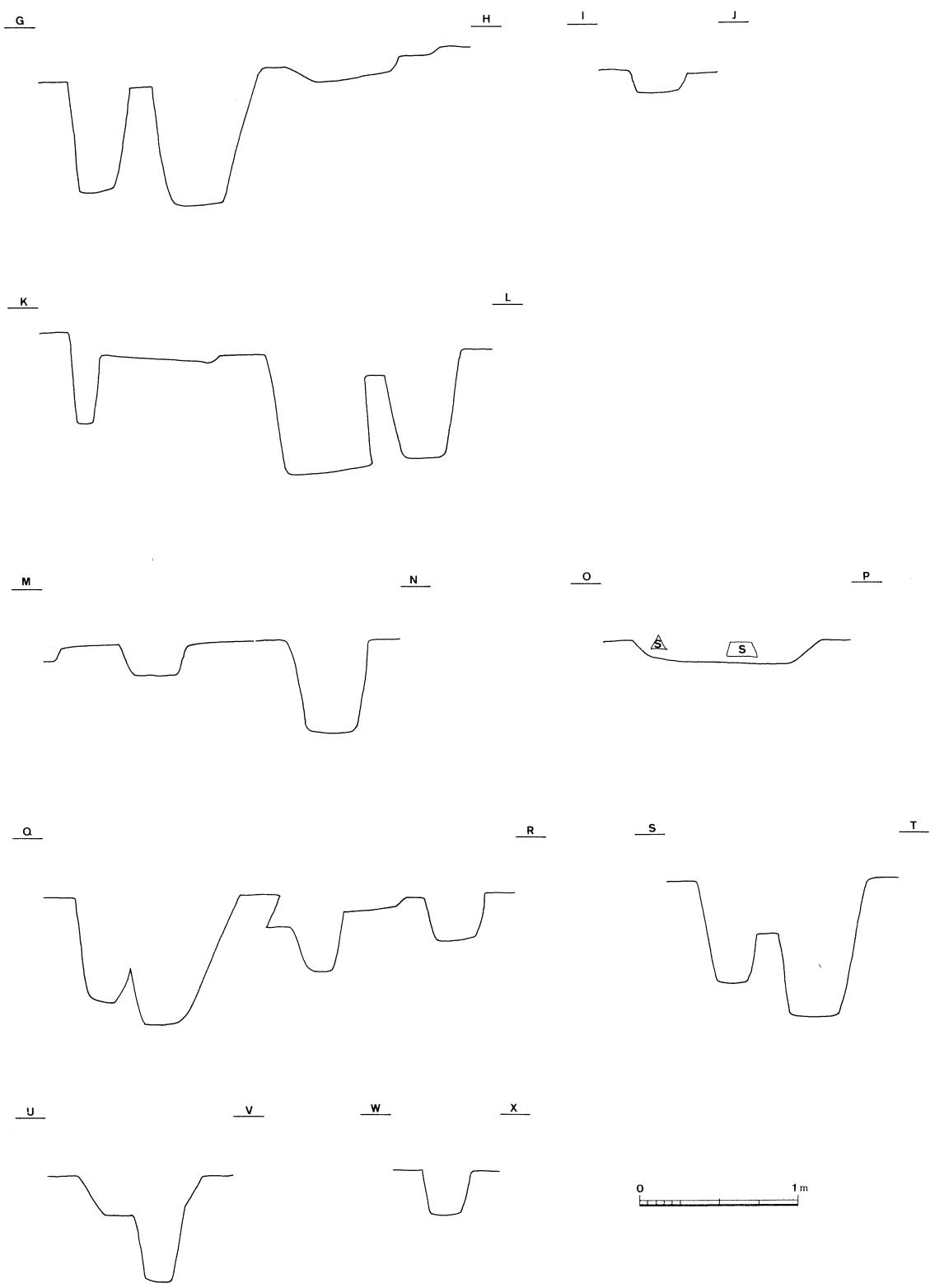
4 褐色土 しまりなし

5 褐色土 しまりなし 焼土粒・炭化物含む

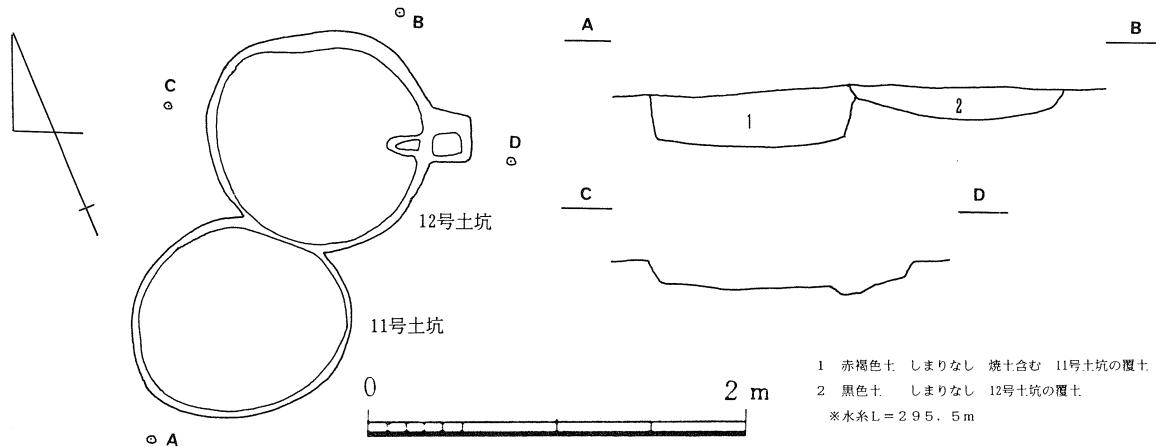
6 暗褐色土 しまりなし

※水系L = 295.0 m

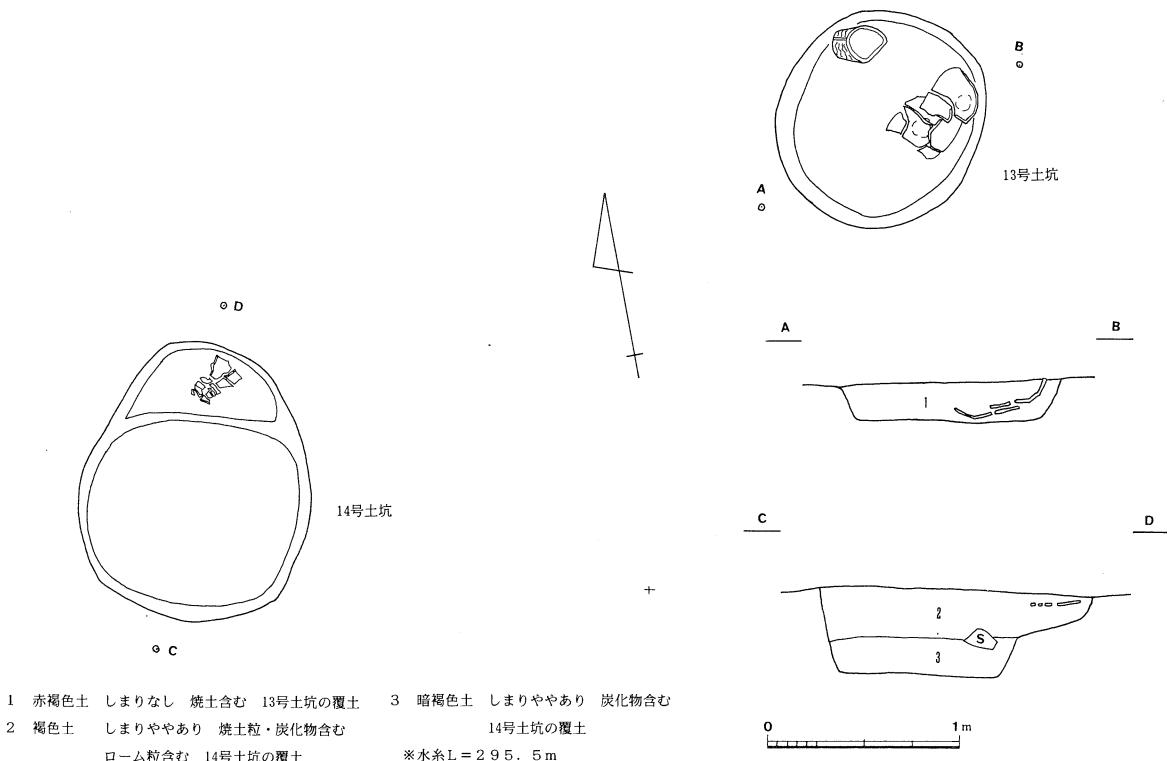
第21図 9号住居址 (1)



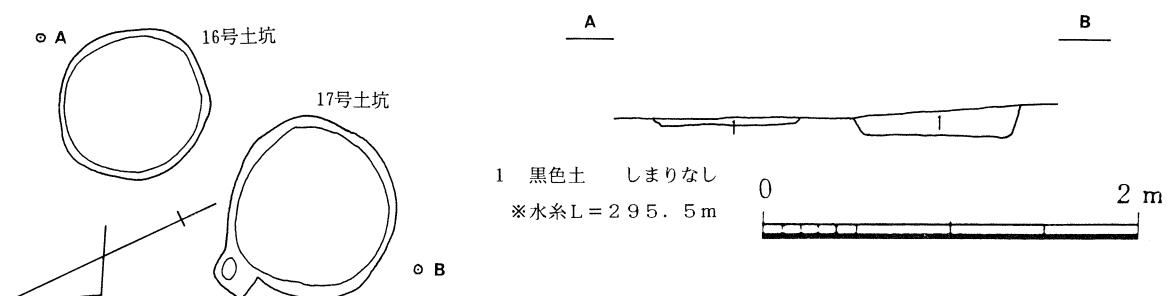
第22図 9号住居址 (2)



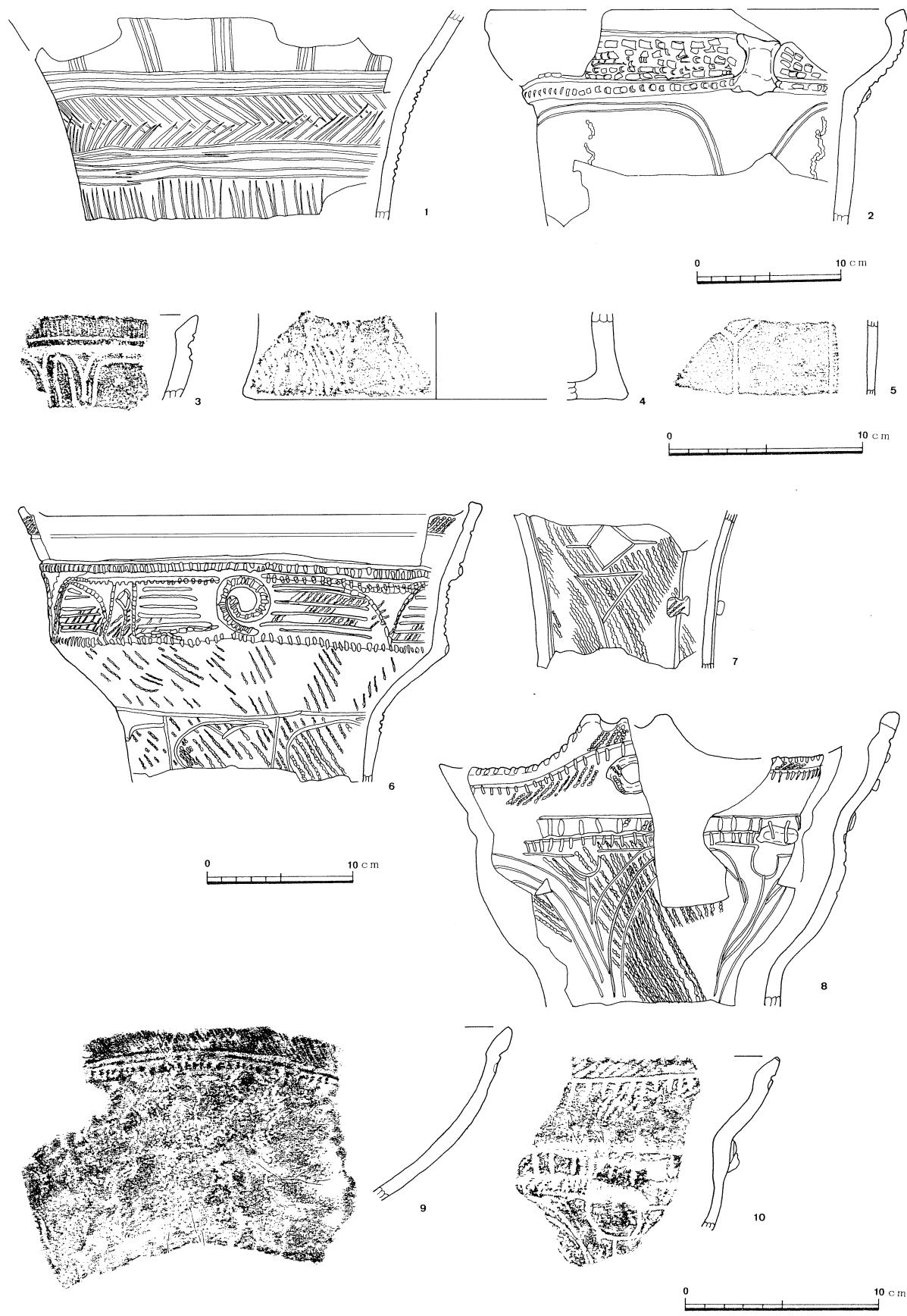
第23図 11~12号土坑



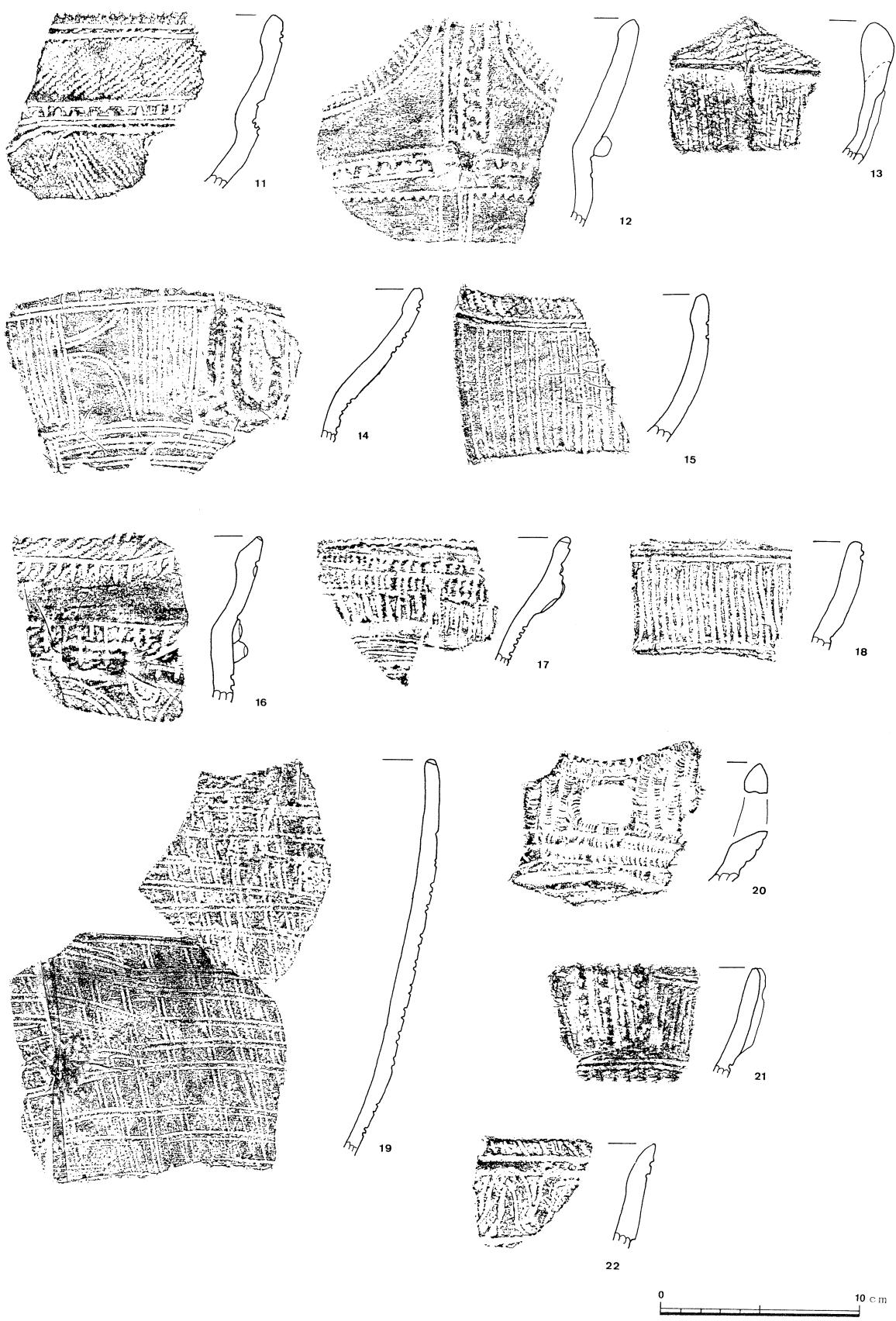
第24図 13~14号土坑



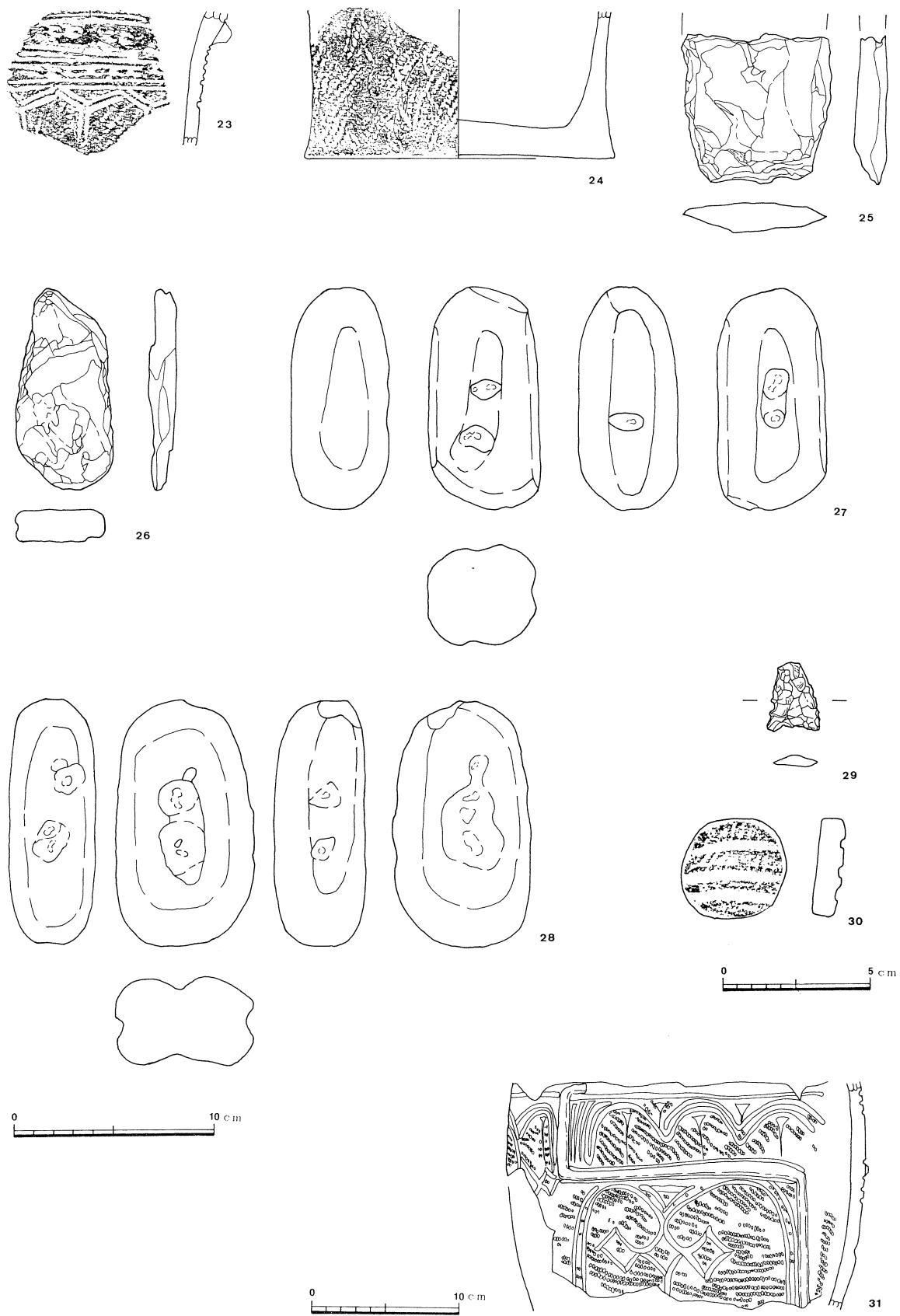
第25図 16~17号土坑



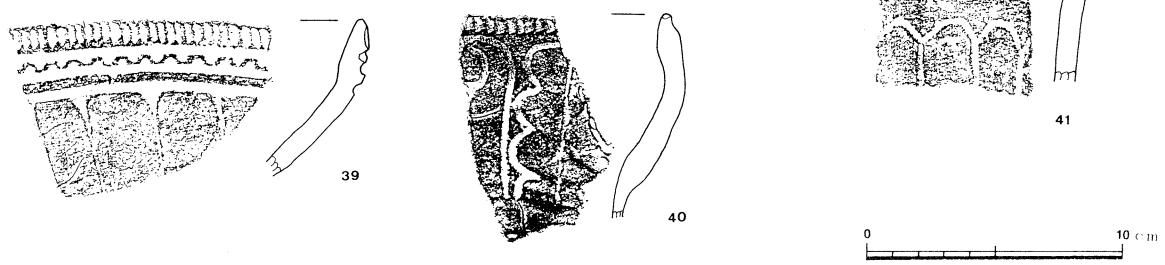
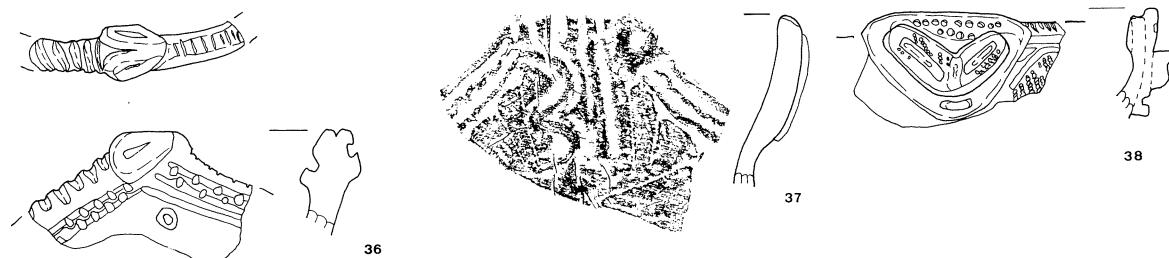
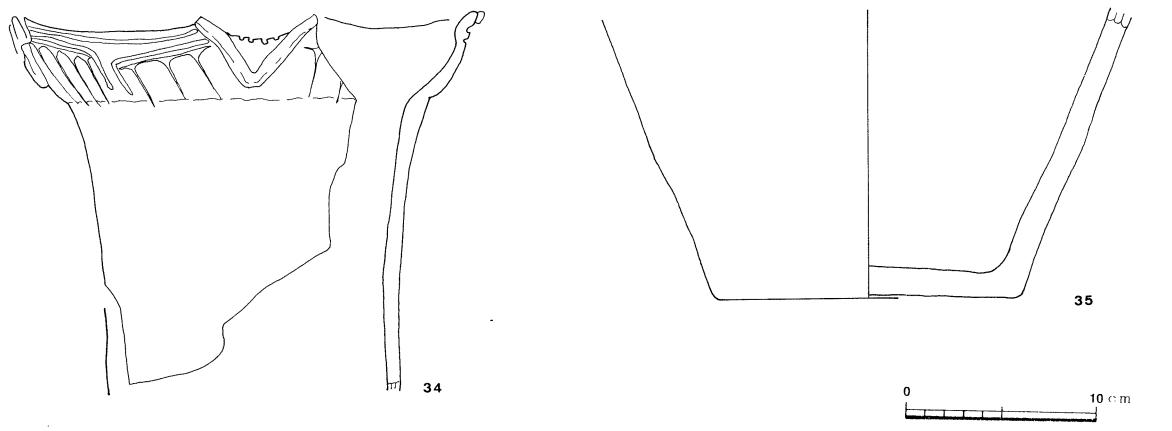
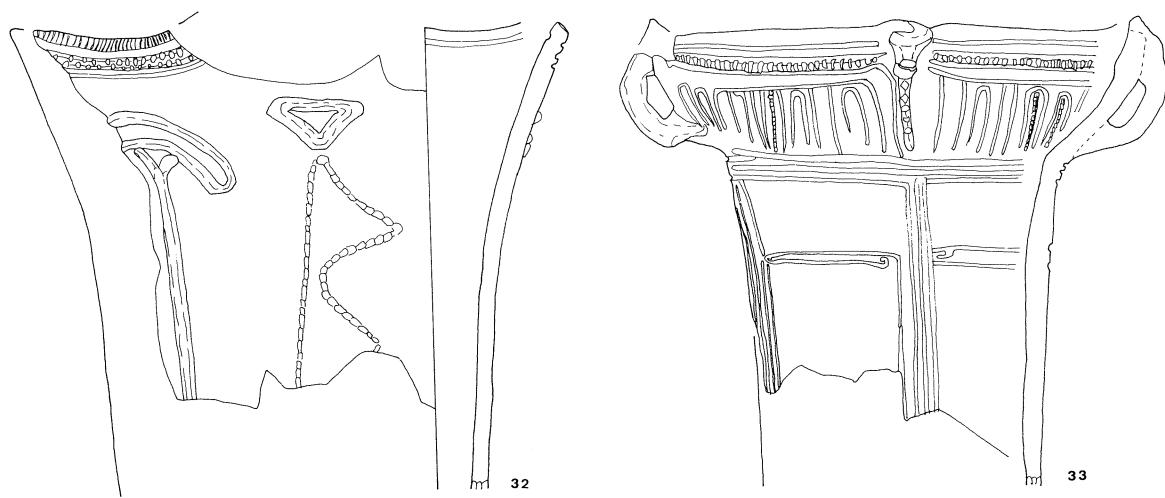
第26図 出土遺物 (1)



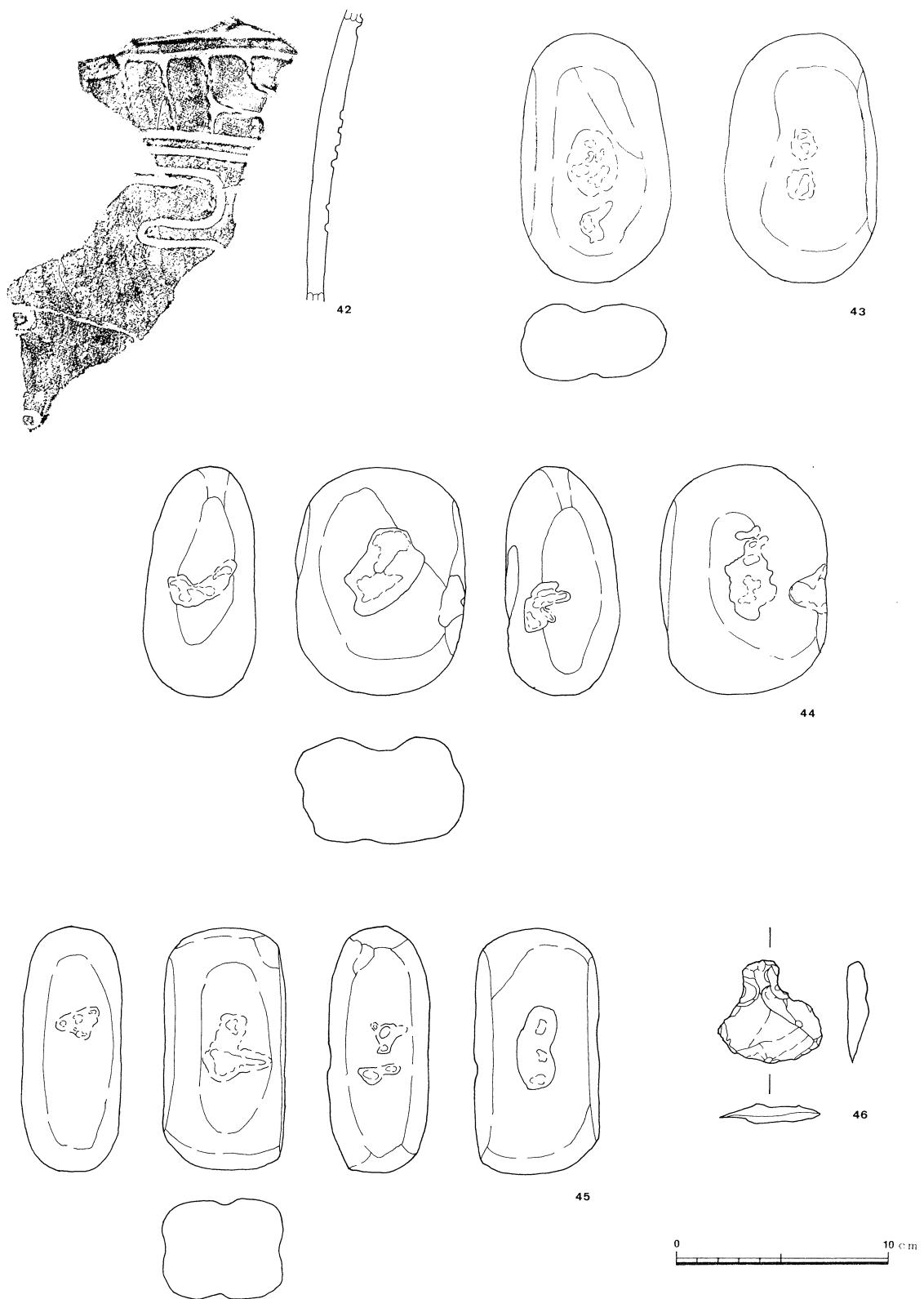
第27図 出土遺物(2)



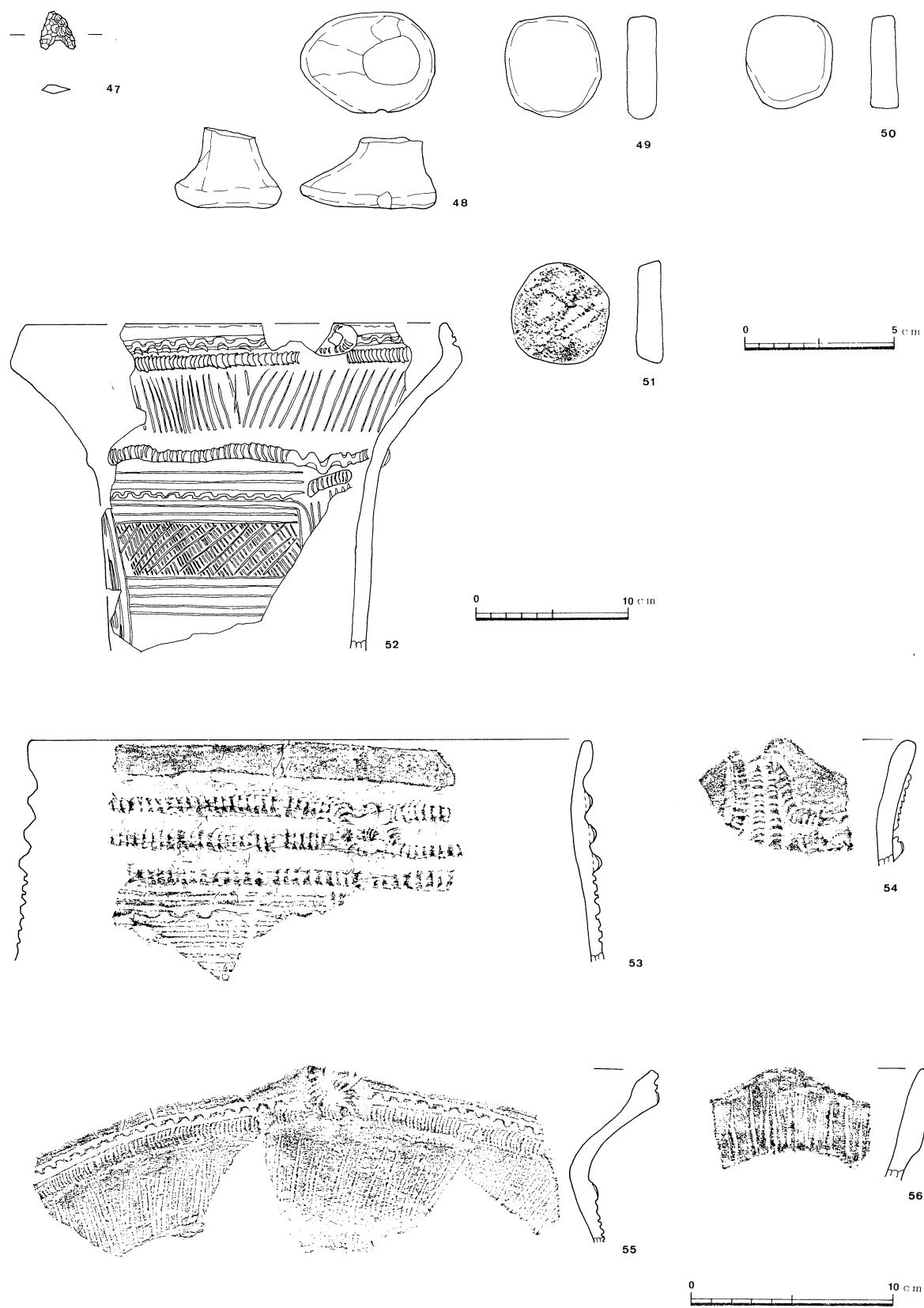
第28図 出土遺物 (3)



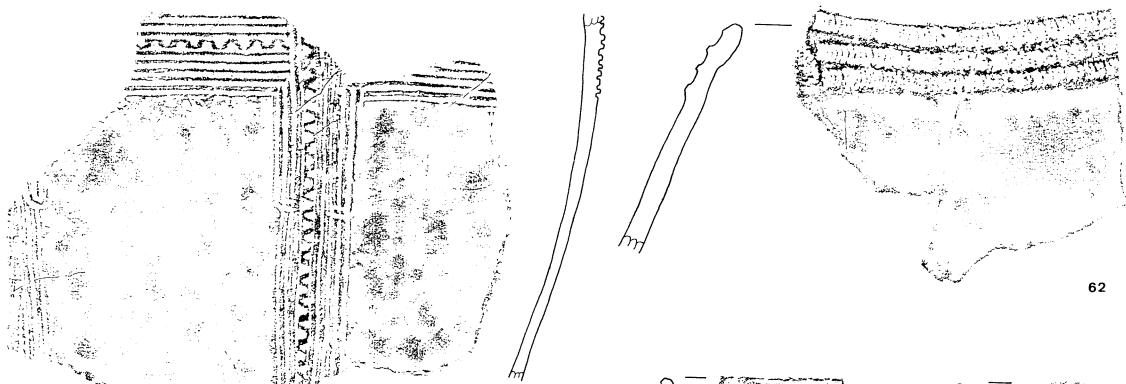
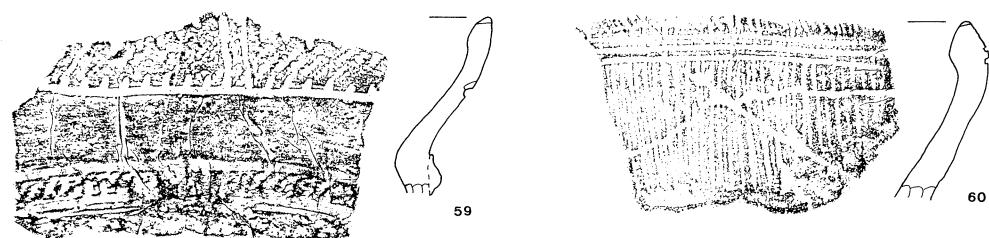
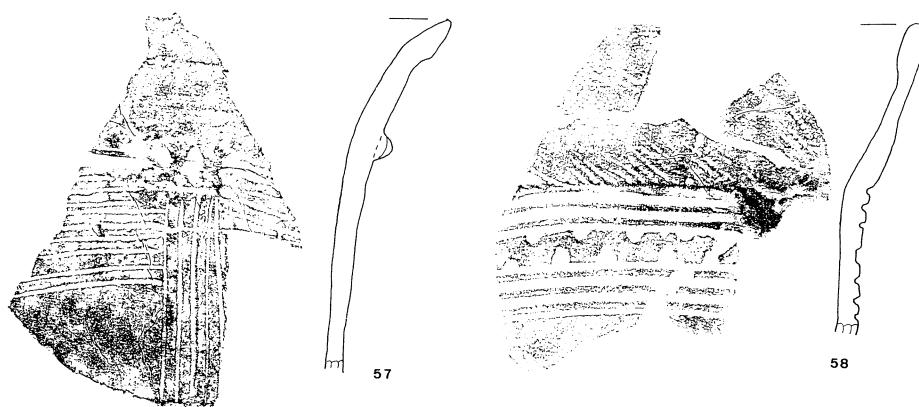
第29図 出土遺物 (4)



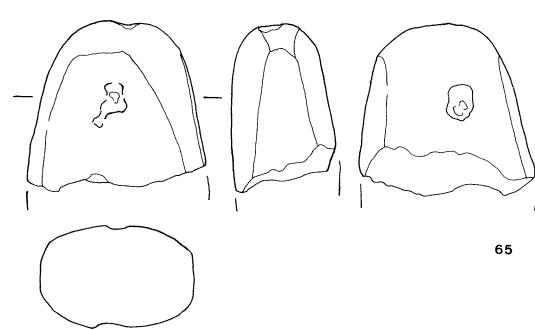
第30図 出土遺物(5)



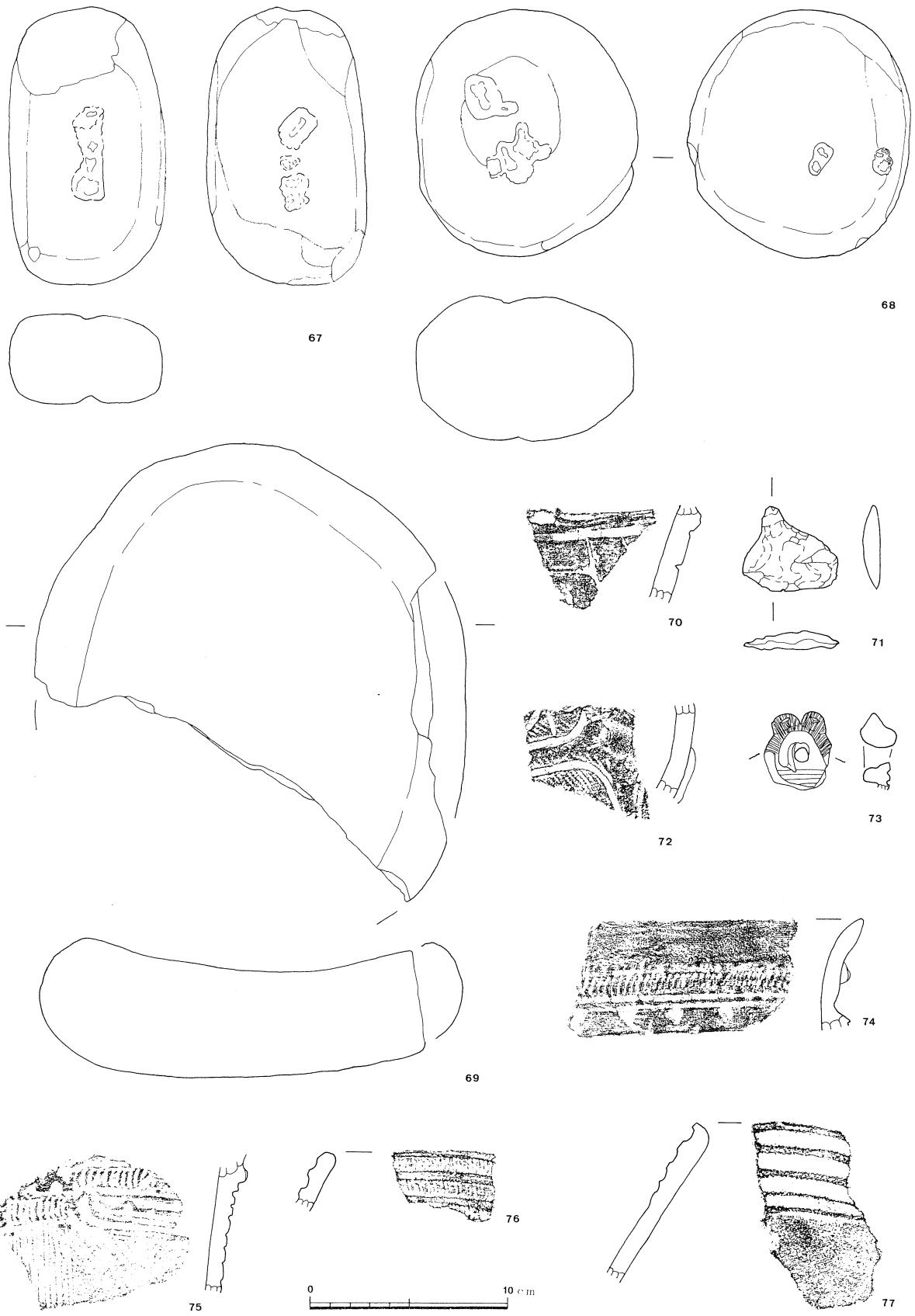
第31図 出土遺物 (6)



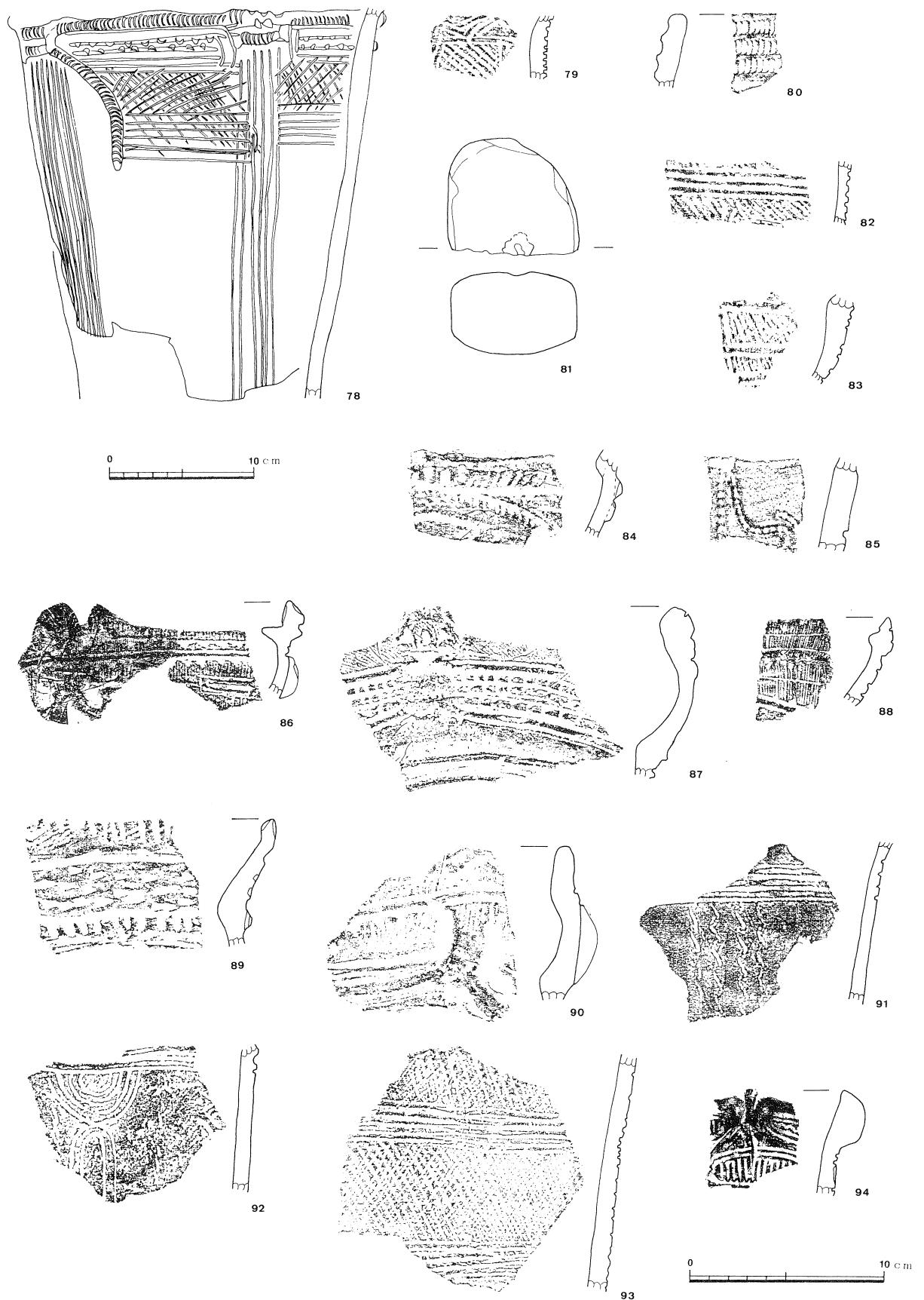
0 10 cm



第32図 出土遺物 (7)



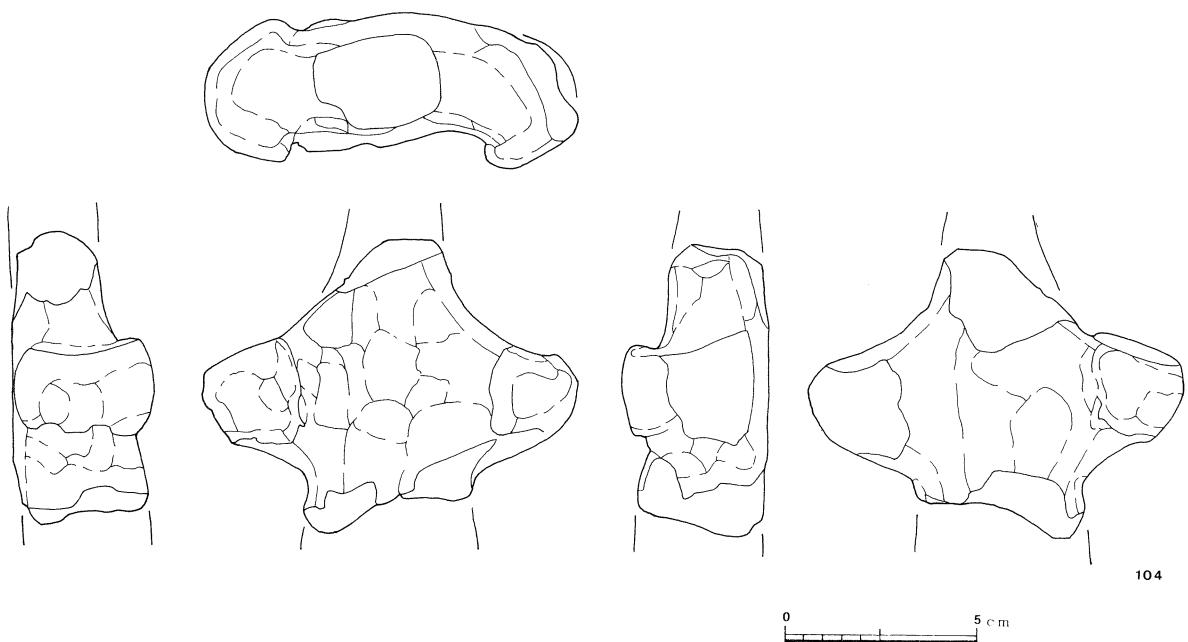
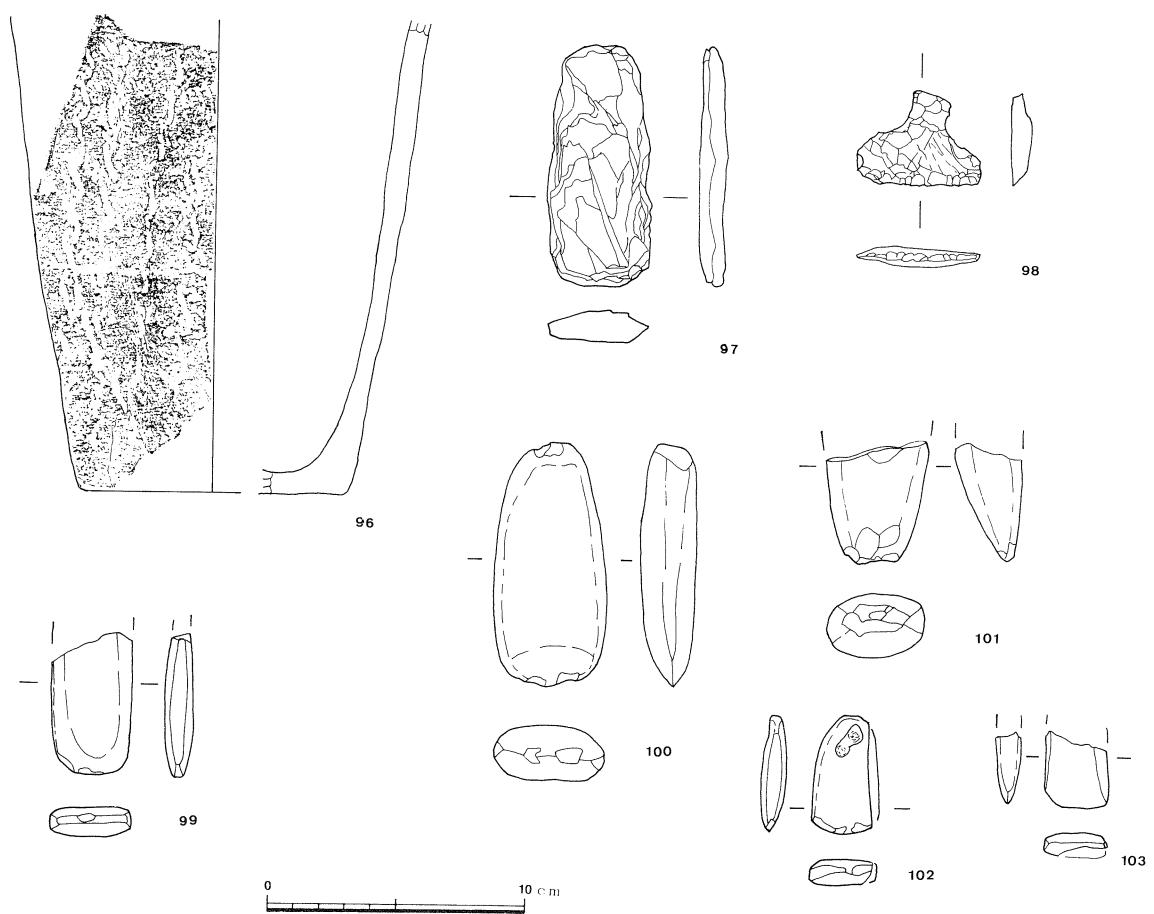
第33図 出土遺物 (8)



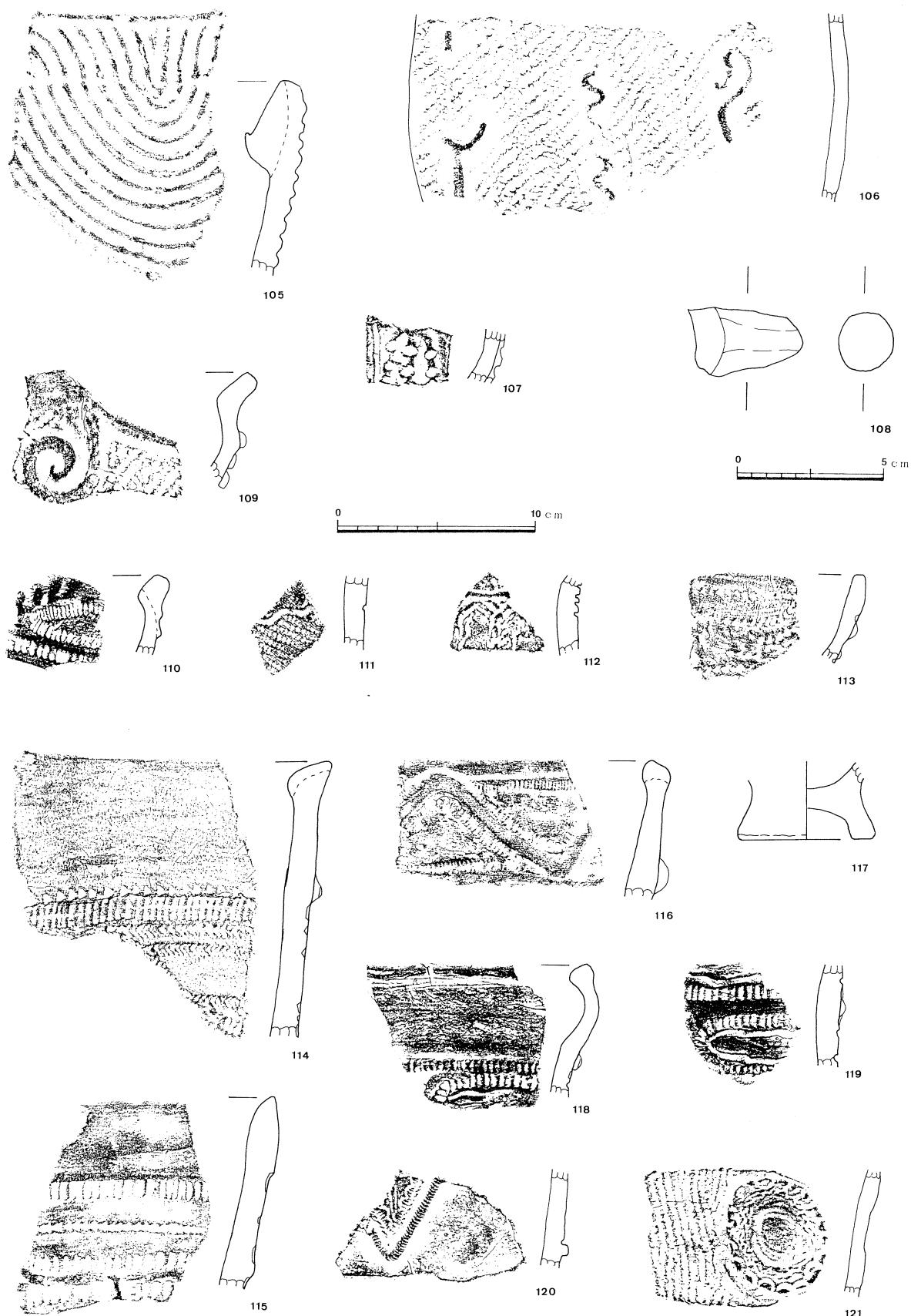
第34図 出土遺物 (9)

第35図 出土遺物 (10)

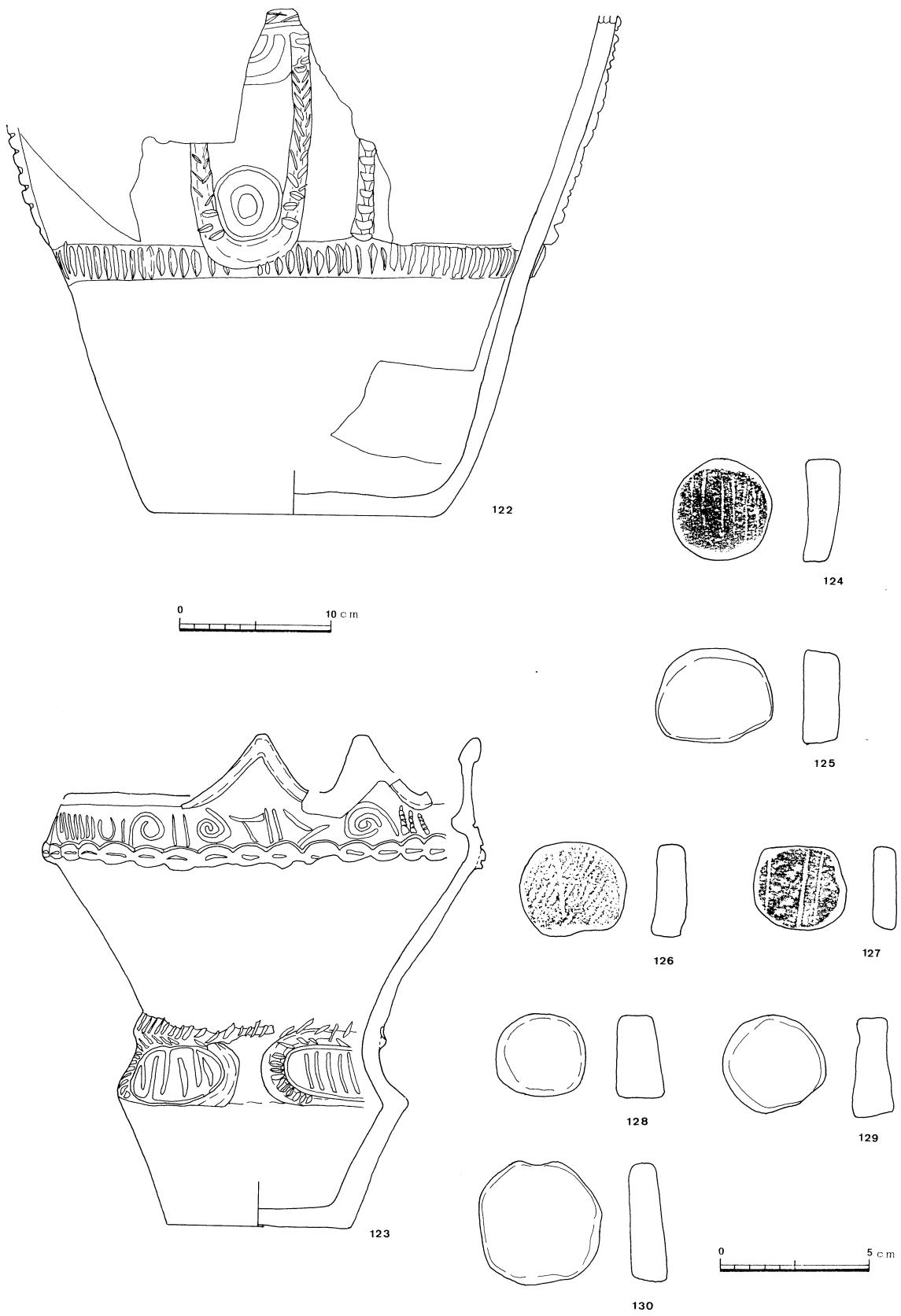




第36図 出土遺物 (1)



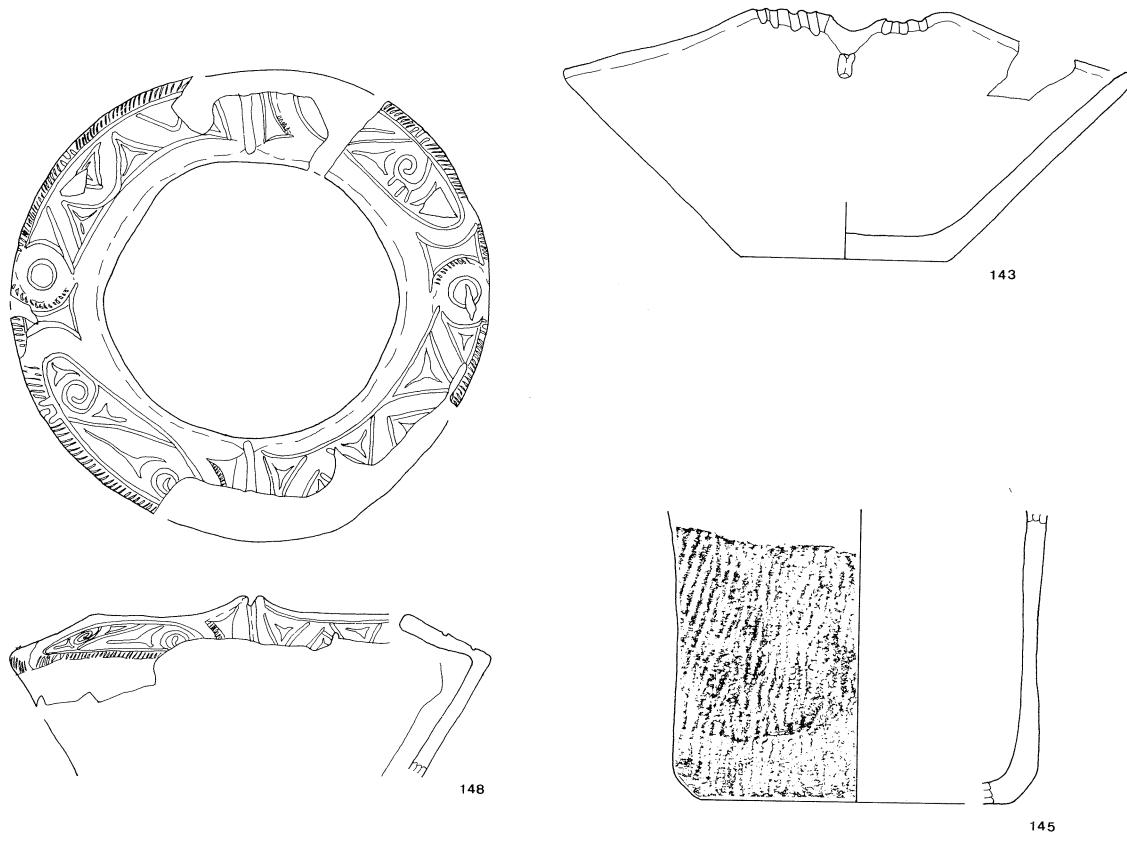
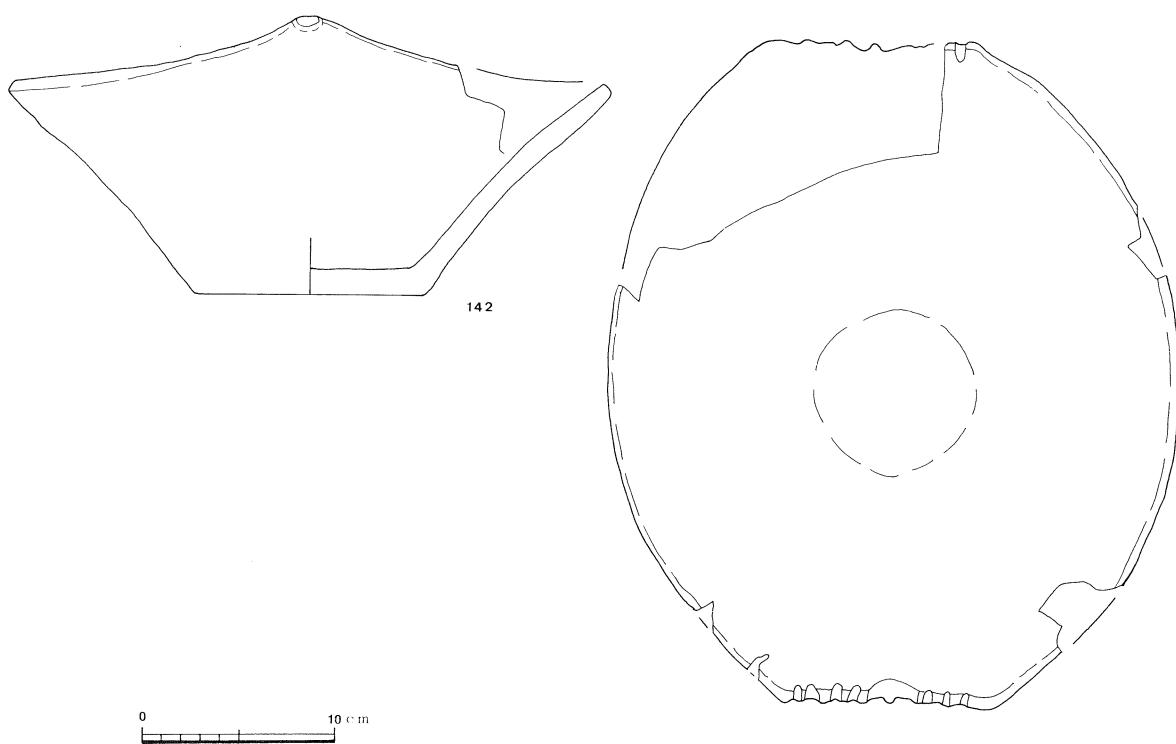
第37図 出土遺物 (12)



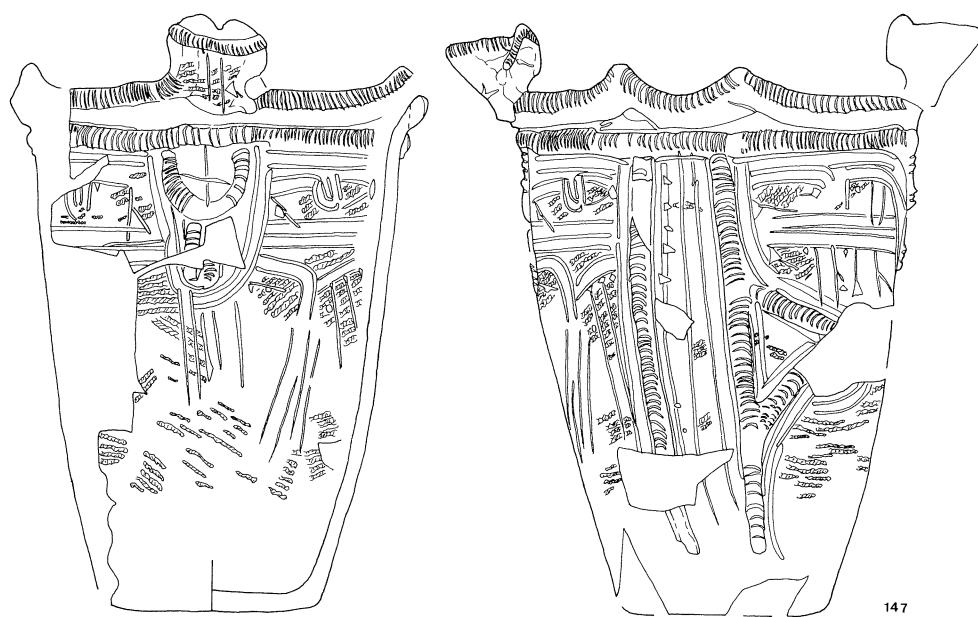
第38図 出土遺物 (13)



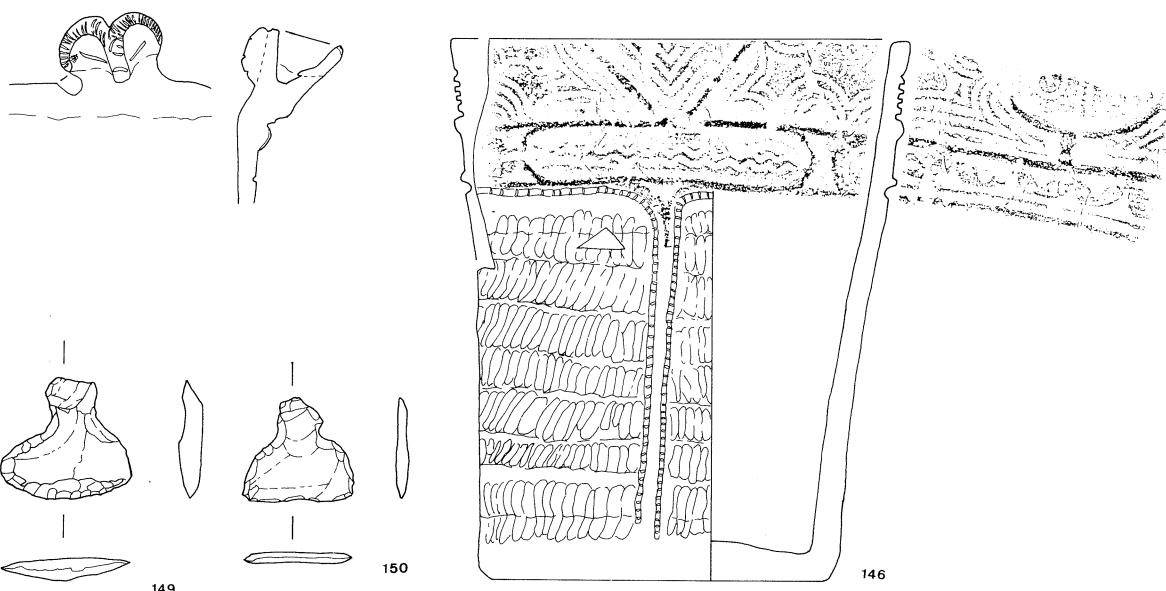
第39図 出土遺物 (14)



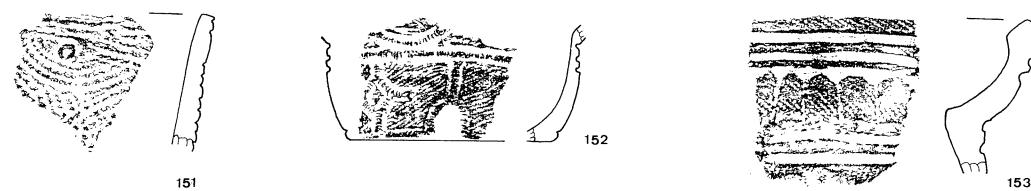
第40図 出土遺物 (15)



147



146



151

152

153



第41図 出土遺物 (16)



第42図 出土遺物 (17)



第43図 出土遺物 (18)





A区全景（北から）



A区全景（南から）



A区土坑群



1・2号住居址



1号住居址埋甕炉



2号住居址埋甕炉

図版  
2



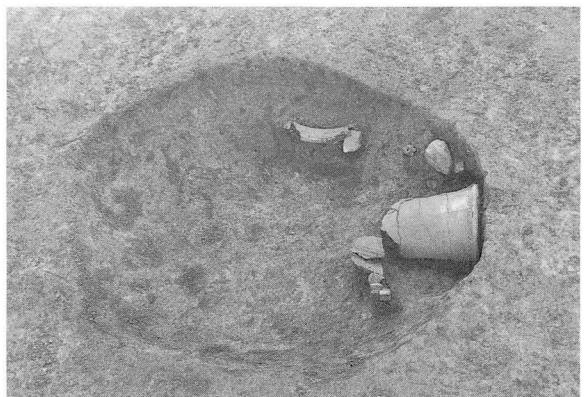
3号住居址



3号住居址埋甕炉



3号住居址埋設土器



4号土坑



4号土坑土器出土状況



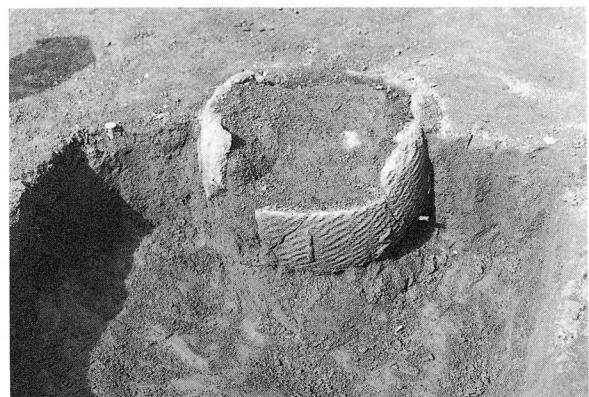
8号土坑



B区全景（南から）



5号住居址



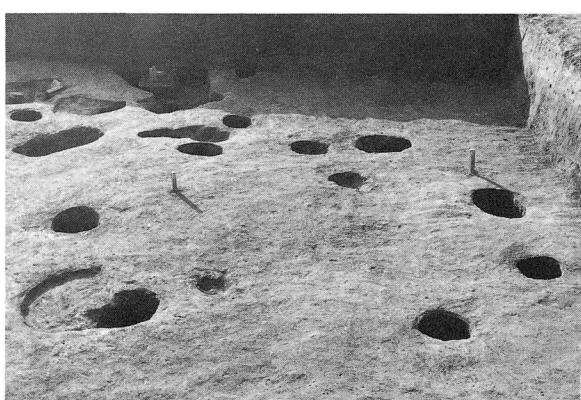
5号住居址埋甕



6号住居址



7号住居址



8号住居址

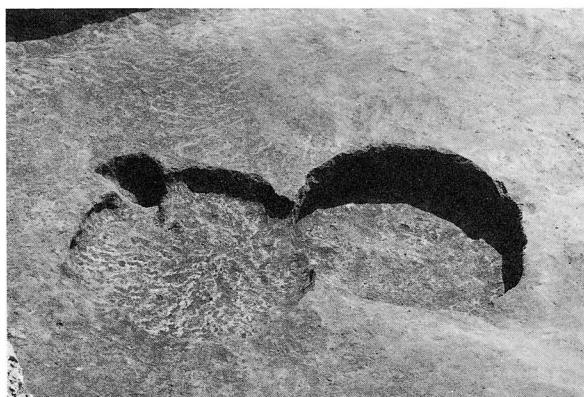
図版  
4



9号住居址



9号住居址ピット内土器出土状況



11・12号土坑



13号土坑



14号土坑



14号土坑土器出土状況



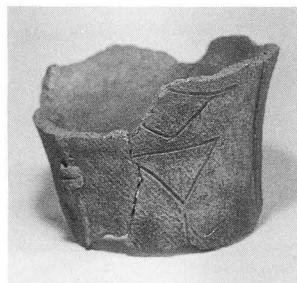
1号住居址出土土器



1号住居址埋甕炉



2号住居址埋甕炉



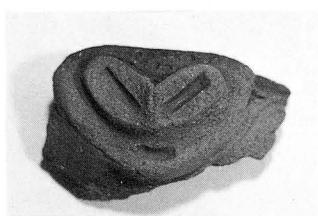
2号住居址埋甕炉



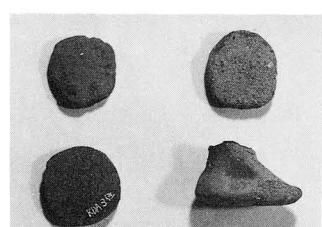
3号住居址埋甕炉



3号住居址出土土器



3号住居址出土土器



3号住居址出土土製品



3号住居址出土土器



3号住居址出土土器



4号住居址出土土器



4号住居址出土土器



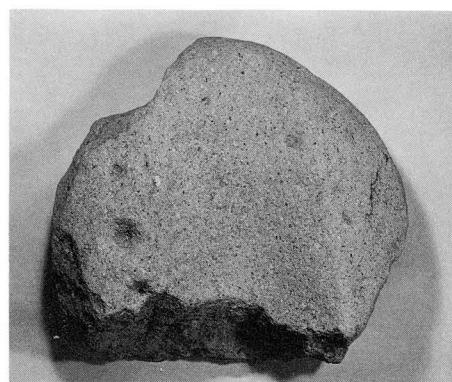
4号住居址出土土器



4号住居址出土石器



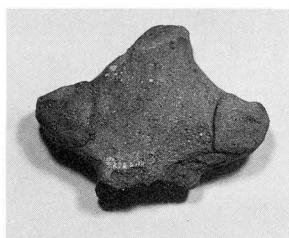
1号性格不明遺構出土土器



1号性格不明遺構出土石器



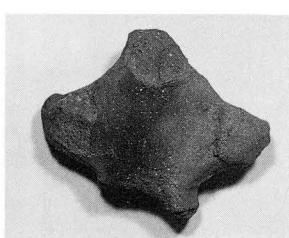
4号土坑出土土器



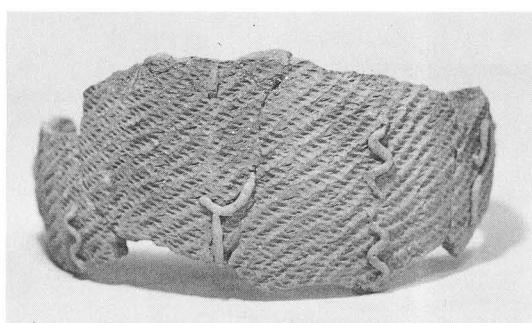
A区出土土偶(正面)



9号住居址出土土器



A区出土土偶(背面)



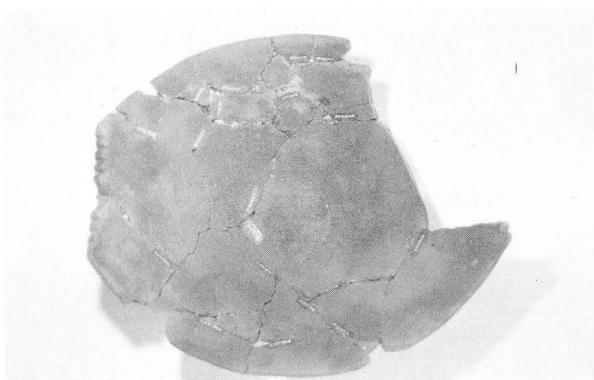
5号住居址埋甕



9号住居址出土土器



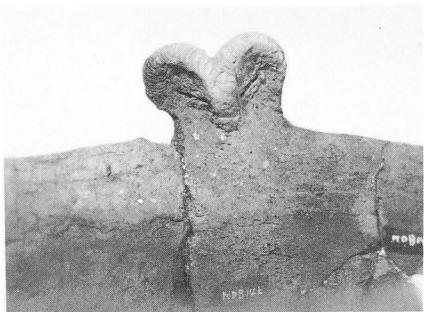
13号土坑出土土器



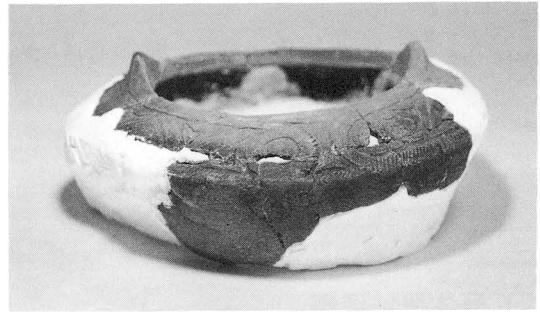
13号土坑出土土器



14号土坑出土土器



14号土坑出土土器人面部



14号土坑出土土器

## 報告書抄録

ふりがな	こまだいらいせき				
書名	駒平遺跡				
副書名	村道シルクライン建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書				
シリーズ名	豊富村埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第7集				
編著者名	岡野秀典				
編集機関	豊富村教育委員会				
所在地	〒400-1594 山梨県東八代郡豊富村大鳥居3866 TEL 0552-69-2447				
発行年月日	1998年3月31日				
ふりがな 所有遺跡名	コ　一　ド		調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
駒平遺跡	市町村	遺跡番号			
駒平遺跡	山梨県東八代郡豊富村 木原12-1他	19328	県 1 村 11	19971215 19980327	1,192.5 道路建設
所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
駒平遺跡	集落跡	縄文時代中期	住居址 土坑 小穴 性格不明遺構 溝状遺構	9軒 17基 4基 1基 2本	縄文時代中期の土器・ 土製品 深鉢・浅鉢・人面付 土器・土偶等 縄文時代中期の石器 打製石斧・磨製石斧 石鏃・石匙・凹石等

豊富村埋蔵文化財調査報告書第7集

## 駒平遺跡

村道シルクライン建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 1998年3月31日

発行所 豊富村教育委員会

〒400-1594 山梨県東八代郡豊富村大鳥居3866

TEL 0552-69-2447

印刷所 株エンドレス

〒405-0014 山梨県山梨市上石森123

TEL 0553-22-4574

